



平成28年度事業成果報告書

文部科学省 補助事業 GGJ (Go Global Japan)



「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」

## 平成28年度事業成果報告書



文部科学省 補助事業 GGJ (Go Global Japan)  
経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援  
平成28年度事業成果報告書



杏林大学 国際交流センター

三鷹キャンパス 〒181-8611 東京都三鷹市新川6-20-2  
井の頭キャンパス 〒181-8612 東京都三鷹市下連雀5-4-1

杏  
林  
大  
学



杏林大学

## 目 次

---

学長あいさつ	P 2
「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業の概要	P 3
1. 平成 28 年度 GGJ 事業取組み及び成果概要	P 5
2. 卓抜した語学力《日中英トライリンガル》の養成	P 8
3. スマートでタフな交渉能力の養成	P12
4. 学生の留学先となる協定校開拓・交流事業の拡大	P15
5. 平成 28 年度の海外交流の展開	P18
6. 学生の海外留学・研修の促進及び支援体制	P20
7. 学生・教職員のグローバル力育成	P28
8. 大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制の確立	P36
9. 事業の経過・成果等の対外広報の展開	P42
10. 今後の展開	P43

## 学長あいさつ



学長 跡見 裕

杏林大学では、教育理念として「優れた人格を持ち、人のために尽くすことのできる国際的な人材を育成すること」を掲げ、国際協力に貢献できる人材の育成に努めております。平成 24 年度以降、本学のグローバル人材育成構想を実現すべく学内外において積極的に事業を展開してきました。事業の成果は補助対象の外国語学部にとまらず、杏林大学全体にグローバル人材育成の機運が広がりを見せ、平成 28 年度はこの実績をさらに高め事業展開をより一層加速させるため、全学的な体制で実施にあたってまいりました。

平成 28 年4月に外国語学部をはじめとする 3 学部、2 研究科(大学院)を八王子から「井の頭キャンパス」に移転し、医学部や医学研究科等を含むすべての教育研究施設を三鷹市に集結させました。これにより、井の頭キャンパスには本事業の中心となる国際交流センター、交流プラザ、語学(中国語・英語)サロン、アクティブラーニング教室、同時通訳演習室などを集約して配置し、外国語学部の学生のみならず、全学部の学生がそれらの施設の利用・活用が可能となっています。

補助期間最終年度となる平成 28 年度は、本学が取り組んでいるグローバル人材育成事業で掲げている「卓抜した語学力(日中英トライリンガル)」を継続して強化するとともに、中国の協定校と本学の学生が相互に大学を訪問してゼミナールレベルの研究交流プロジェクトを実施する等、「スマートでタフな交渉能力」の備えた人材を育成すべく、語学力と異文化理解力の涵養を図ってまいりました。

平成 28 年度をもって補助期間は終了となりますが、終了後も本事業を持続的に展開するとともに、引き続き大学のグローバル化、学生をグローバル人材として育成すべく取り組んでいく所存です。

# 「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業の概要

取組学部：外国語学部（942人） 英語学科・中国語学科・観光交流文化学科

## 【構想の目的・育成するグローバル人材像】

21世紀の日本社会は、これまでも増して様々な分野でのグローバル化が進行し、国際的人材の必要性がより高まっている。また世界の諸地域、特に経済発展の著しいアジアの中で日本の国際競争力の向上は喫緊の課題である。

今後、日本が進める国際協力は国際競争と表裏一体であり、海外の国々と共に成長・発展するパートナーとして対等の関係性を構築することが重要である。

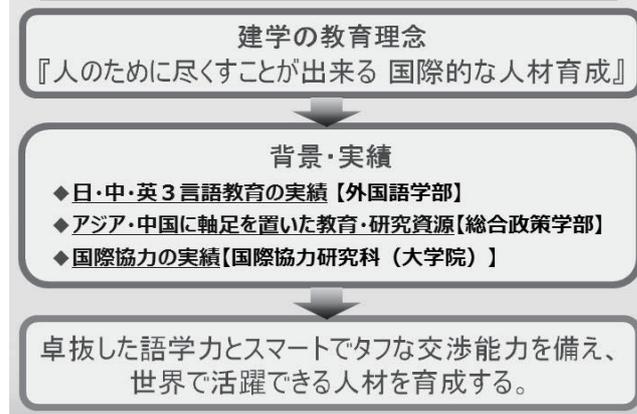
国際協力・国際競争においては、日本人としてアイデンティティを維持しつつも広い視野を持った国際人としての感覚を持つこと、すなわち自らの文化と同等に異文化の尊厳を尊重する姿勢が肝要である。この対等の関係性と誠意・熱意により醸成される永続的な信頼関係は、個人と個人の信頼関係、国と国との絆の構築に寄与する。さらに共に成長・発展する対等のパートナーとしての信頼と競争的關係は、理想的な国際協力へと発展し日本が尊敬される豊かな国への礎となることが期待される。

## 【構想の概要】

外国語学部は、共通言語としての英語に加え、中国語教育に重点をおいてきた。中国語と英語をツールとすることは、アジアでのビジネス展開や交渉の場で活躍する第一歩であり、ひいては全世界への飛躍につながる。

本事業は、「卓抜した語学力」と「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えたグローバル人材を養成することを目指す。外国語学部の語学教育をさらに強化するとともに、アジア・中国に軸足を置いた学際的な教育資源を持つ総合政策学部と連携し、最終的には学内外への成果の波及を図るものである。

## 構想の概要



## 1. 卓抜した語学力の養成……………

「卓抜した語学力」とは「責任ある仕事を遂行できるレベルの語学力」を意味する。独自に開発した実践的語学教育プログラム(CIC、PEP等)を少人数クラスで実施することに加え、ネイティブスピーカーと目標言語のみでコミュニケーションをする「中国語サロン」「英語サロン」の常設、中国の名門大学から来ている留学生との積極的な交流、eラーニング、BBC・CNN・中国国営テレビ等の常時放映・視聴、同時通訳システムの積極的活用などを通して、より実践的な語学力の習得を目指す。

## グローバル人材育成方法(1)

### 《卓抜した語学力》

・独自開発のプログラム(CIC・PEP)を5名程度の少人数クラスで実施。

CIC : Chinese for International Communication

PEP : Practical English Program

- ・「中国語サロン」「英語サロン」の常設
- ・キャンパス内の中国語・英語エリア拡大
- ・協定校からの外国人教員招聘



## 2. スマートでタフな交渉能力の涵養……………

「スマートでタフな交渉能力」とは「自他の文化と教養に精通し、文化的慣習をわきまえ、対等に交渉することで創造的な結論を導き出せる能力」を意味する。「国際関係論」「アジア政治論」等の総合政策学部開講科目の履修に加え、PBL形式のディベートシミュレーションである「ケーススタディ演習」を通して、一般的な語学検定試験のスコアには表れにくい「問題発見力」「問題解決力」「自己表現力」を養成する。留学等の「プログラム修了プレゼンテーション」や「卒業研究報告会」を中国語あるいは英語で行い、母語話者との質疑応答能力を外部評価委員が判定することで学習成果の評価を行う。

## 3. 海外留学、研修の推進……………

「卓抜した語学力」や「スマートでタフな交渉能力」を兼ね備えたグローバル人材を育成するために、海外留学は極めて重要な位置を占める。本学では、独自の奨学金制度や授業料等減免制度による経済的支援のほか、専門の教職員による留学前・留学中・留学後のきめ細かな指導・支援を行っており、留学を通して、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなシステム「主体的な留学プログラム(Active Studying Abroad Program: ASAP)」により、学士課程終了まで一貫したサポート体制を整備し、学生の海外留学・研修の推進をしていく。

## グローバル人材育成方法(2)

### 《スマートでタフな交渉能力》

#### 総合政策学部開講科目の積極的な履修を推進

「国際関係論」「国際経営学」「アジア政治論」「アジア経済論」等



・「中国語で学ぶ」専門科目開講

・産学・高大院連携シンポジウムの開催

・国内外でのインターンシップ・ボランティア活動の積極的奨励

#### ケーススタディ演習

PBL形式のディベートシミュレーション



## 学習成果の確認

### 《卓抜した語学力》 - 検定試験を活用-

	中国語学科 (日中通訳翻訳プログラム)	英語学科 観光交流文化学科
中国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・HSK5級以上 (中国一流大学入学レベル)</li> <li>・中国語検定2級以上</li> <li>・通訳案内士(中国語)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・HSK2級以上 (日常会話レベル)</li> <li>・中国語検定4級以上</li> </ul>
英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TOEIC500点以上</li> <li>・TOEFL iBT52点以上</li> <li>・IELTS4.5点以上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TOEIC800点以上</li> <li>・TOEFL iBT80点以上</li> <li>・IELTS6点以上</li> </ul>

### 《スマートでタフな交渉能力》 - 外部委員による客観的評価-

#### プログラム修了プレゼンテーション

中国語あるいは英語でプレゼンテーションを行い、学習成果を評価

#### 卒業研究報告会

中国語あるいは英語で発表し、母語話者との質疑応答能力を評価

## 「主体的な留学プログラム」と留学支援体制

### 「主体的な留学プログラム」Active Studying Abroad Program

留学を軸に、語学能力向上に加え、グローバル人材として具備すべき知識・能力を修得できるようなスキーム

#### 【事前準備】

・語学力向上(CIC・PEP)  
・教養知識の涵養  
・留学目的の明確化

#### 【留学】

インターンシップを含む現地での生活体験を通して、語学力と異文化理解力の涵養

#### 【留学後展開】

・プログラム修了プレゼンテーション  
・ゼミナールでの専門的個別指導

海外留学の積極的支援(現在の海外協定校は32校、今後5年で50校まで拡大予定)

1. 交換留学では留学先の学納金免除
2. 派遣留学では本学学納金8割減免
3. 海外研修・留学奨学金制度の継続的な拡充
4. 留学先で取得した単位を卒業要件単位に認定
5. キャリアサポートセンターを中心とする留学中・帰国後の就職活動支援





# 1. 平成28年度GGJ事業取組み及び成果概要



平成24年度以降、本学のグローバル人材育成構想を実現すべく学内外において積極的に事業を展開してきた。事業の成果は学生のみならず、学内各部署でも共有され、グローバル人材育成の機運は着実に高まりを見せている。平成28年度は、その実績を更に高め、事業展開をより一層加速させるため、全学的な体制で実施にあたった。

## (1) 各観点における取組み、成果……………

### ①教育課程の国際通用性の向上

- ・教育課程の国際通用性向上のための取組みとして、セメスター制導入により「興味関心・能力に合わせた積上型学習」、「海外留学・研修の機会拡大」が実現している。
  - ・平成25年度から導入されたGPAによる成績評価制度により「単位認定の質保証」「学修指導(アカデミックアドバイス)への活用」「交換留学相互受入基準の明確化」「奨学金受給者選定基準の厳格化」がより一層実現された。また、平成24年度に導入したコース・ナンバリング制を精査し、グローバル人材育成のための体系的カリキュラム整備を実施することで教育課程のさらなる国際化を進めている。
  - ・戦略的な国内外への教育情報の発信として、本事業特設サイト(中・英語版・スマートフォン版を含む)や本事業紹介パンフレット「Let's Go Global! 世界をめざそう!」の改訂版を発行し、本事業の最新情報や成果報告を遅滞なく更新・発信し、国内外に向けた広報・成果の波及を図った。
- また、平成28年度の各学部のカリキュラム改正に合わせ、カリキュラムの多言語化(改訂版)も進めた。
- ・語学検定試験のスコアを語学授業の成績に反映させる授業デザインを行い、学習成果の客観的な可視化を推進した。また、ループリッ

クの開発を行ない、入学時・留学前・留学後・卒業時に自己・他己評価を実施することで、より客観的な評価方法を用いて学士課程における学修成果を可視化することができるようシステムを整備した。

### ②グローバル人材として求められる能力の育成

- ・昨年度に引き続き、日本のグローバル企業3社との懇談で、求められる「グローバル素養」について意見を聴取し、育成すべき「グローバル人材像」の確認を行った。この定義をもとにグローバルループリックを構築し、その評価測定を行っている。学生はグローバルループリックの入力作業をとおして、自身が身に付けるべきグローバル素養を確認するとともに、ループリック評価を毎年実施することで、その評価値の経年推移グラフにより、成長過程を確認できるようになった。
- ・「スマートでタフな交渉能力」を涵養する場として設置したアクティブラーニング教室で、PBL(課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブラーニングを実施した。
- ・海外留学から戻った学生による「プログラム修了プレゼンテーション(留学帰国者報告会)」や「卒業研究報告会」を開催した。学生は学習言語(中国語または英語等)によるプレゼンテーションを行って、語学力に加えてプレゼンテーション能力や母語話者による質疑応答に粘り強く説明し切る交渉能力等の上達度を測定した。

### ③語学力を向上させるための入学時から卒業時までの一体的な取組み

- ・本学が目指す「日中英トライリンガル」育成のため、ネイティブスピーカーの教員や外国人留学生が学生と外国語で会話する「中国語サロ

ン]、「英語サロン」を運営している。その利用者は外国語学部生にとどまらず、他学部からの参加者も増加してきている。4月のキャンパス移転により2つのキャンパスが近接したことに伴い、これまで利用の少なかった三鷹キャンパスの学生が語学サロンを活用することにもつながり、全学的な波及が進んでいる。

- ・中国語及び英語のe-ラーニングによる語学学習は、インターネット接続環境にいる限り、時間や空間の制約を受けることなく語学学習を実施できるメリットがある。平成28年度も、正課授業(CICやPEP、実用英語演習等)と連動させることを強化し、継続的に学習言語に触れる習慣を醸成することで学習効果を高めた。
- ・外国語によるコミュニケーション力を高めるための「中国語サロン」、「英語サロン」、各種イベントや学生のグループ学習の場として提供されている「交流プラザ」では、常時CCTV、BBC、CNNのニュース番組を放映し、キャンパスに居ながらにして海外にいるような外国語の環境を提供している。
- ・入試における中等教育段階までの外国語力・留学経験等の適切な評価について、課題のやり取りを通じ学習成果を評価する「AO入試」、語学検定試験の資格やスコアを利用する「資格取得者制推薦入試」、留学経験・在外経験を評価する「帰国子女入試」等で、中等教育段階までの外国語力・留学経験等の積極的な評価を行っている。

#### ④教員のグローバル教育力の向上

- ・教育体制のグローバル化推進のため、グローバルセミナーを定期的で開催し、海外大学の取り組み事例や研修参加者による報告等を全学的FD・SDとして開催し、学内にフィードバックすることにより、情報・成果を全学的に共有する機会を設け、大学のグローバル化をより一層推進させた。参加者は、自身の活動を相対化させることで多くの示唆を得ることが

できた。

- ・グローバル教育力向上のための取り組みとして、昨年に引き続き中国および英語圏の協定校から複数の教員を招聘し、本学教員と授業研究・共同授業等を実施した。

#### ⑤日本人学生の留学を促進するための環境整備

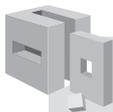
- ・学生の留学を動機付ける取り組みとして、留学経験者の成果を学内に周知させる試みを実施した。海外留学・研修を経験した全学部の学生が一堂に会し報告会を開催(年2回)し、学習言語(中国語・英語等)でプレゼンテーションした。また留学フェアでは留学ガイドブック『Study Abroad』の配布、留学経験者がピアサポーターとして留学未経験者をサポートするなど、学修・留学への動機付けを高める取り組みを行った。
- ・留学報告会、留学フェアなどのイベントのほか、留学プログラム毎の留学ガイダンスを実施した。また、留学中から帰国後にわたるサポート体制として、「留学支援ポートフォリオ」システムにより、出発前から留学中、帰国後にわたり学生の状況把握をするとともに、危機管理を含めたサポートを実施した。なお、大学独自の留学向け奨学金および学納金減免制度も継続実施している。また、留学中の学習成果による単位認定や帰国後の履修指導も行い、半年・1年間留学した学生も4年間で卒業できるよう指導を行っている。さらに海外留学中の学生に対し、学内で開講している「キャリア指導」の授業を、インターネットを通して配信し、海外の留学先で授業を視聴することで、帰国後スムーズに就職活動に入れるよう配慮している。
- ・本事業(タイプB)の対象は外国語学部であるが、他学部においても新たな海外研修プログラムが創出され、海外留学・研修に参加する学生は全学的に増加してきており、本事業の全学波及が確認されている。

## (2) 特記すべき成果等……………

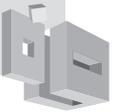
- ・平成28年度は本学外国語学部と中国の協定大学が連携し、学生相互によるゼミナールレベルでの研究交流プロジェクトを実施した。これは共通課題をテーマとしたPBL形式で行うもので、両大学の学生が事前にインターネットによる意見交換等を行った後、実際に相互の大学を訪問してプレゼンテーションやディベートを行った。9月10日には「グローバルシンポジウム」として、両大学の学生が取り組んできた成果を、他大学を含む外部にも公表した。
- ・中国の海外協定校が充実したことも影響し、中国語学科における海外留学者は、平成28年度卒業生(日本人学生)の65.4%を占めた。海外留学を経験した学生は、より発展的な語学力向上を目指し、平成28年度には中国上海の国有企業や観光施設において4名の学生がインターンシップに参加した。これまで学内や海外留学において培った語学力を生きたビジネスの現場で活かすことができ、更なる語学力のレベルアップを図るとともに、日本と中国の両国で活躍しうる人材になるという意欲を高める結果となった。
- ・全学的に海外留学・研修に参加する機運が高まり、医学部では平成25年度以降毎年12～25人以上の学生が海外の大学病院等でのクリニカル・クラークシップ(病院実習)やイギリス協定校における医学英語セミナーに参加、保健学部では従来の全学科対象の海外語学研

修に加え、各学科(看護学科、理学療法学科、作業療法学科、診療放射線技術学科など)に特化した海外研修が創出され、各プログラムに10名前後の学生が参加している。

- ・母語話者が常駐する中国語サロンならびに英語サロンは、外国語学部学生だけではなく、他学部学生や大学院生、教職員にも積極的に開放され、多くの学生が授業の空き時間に両サロンへ足を運ぶようになった。平成28年4月よりキャンパスを移転し全学部の教育・研究機能が三鷹市に集約されたこともあり、これまで利用の少なかった医学部の学生が語学サロンを活用することにもつながり、全学的な利用が確認されている。
- ・外国語学部と医学部の学生5名が学生英語プレゼンテーション大会に参加した。テーマに関する状況分析・問題発見・問題解決案の策定・英語による情報発信を含むこれらの活動は、「卓抜した語学力」と「スマートでタフな交渉能力」の更なる涵養に向け学生が主体的に取り組むきっかけとなった。
- ・平成29年度以降も本事業推進委員会を継続し、本事業を持続的に展開していくことを確認した。また、本委員会が杏林大学のグローバル化の方針についての目標に対する遂行状況の把握、点検評価に関して管理運営を行うことを決め、今後も本委員会を中心に全学的なグローバル化を促進していくことを決定した。



## 2. 卓抜した語学力《日中英トライリンガル》の養成



「卓抜した語学力」とは「責任ある仕事を遂行できるレベルの語学力」を意味する。独自に開発した実践的語学教育プログラム(CIC: Chinese for International Communication、PEP: Practical English Program 等)を少人数クラスで実施することに加え、修得を目標とする言語のみでネイティブスピーカーとコミュニケーションをする「中国語サロン」「英語サロン」の常設、中国の名門大学から来ている留学生との積極的な交流、e-ラーニング、BBC・CNN・中国国営テレビ等の常時放映・視聴、同時通訳システムの積極的活用などを通して、より実践的な語学力の習得を目指した。

### (1) 中国語教育の取組み概要

中国語の教育システムは、中国語学科の1年次300時間集中プログラム(月から金まで毎日1コマで週5～6コマと補講)と他の2学科(現状は英語学科と観光交流文化学科)向けの2年間(学科によっては1年半)の統一プログラム(CIC)を長年来実施している。教科書の統一と、非常勤教員を含めてのチームティーチング、統一テストなどで成果を上げてきた。

中国語学科においては、基礎力養成の後に、2年次に現地への留学を推奨し、帰国後の3年次からのより高いレベルの指導に移るシステムを確立しており、留学帰国後の学生ならびに中国からのハイレベルの留学生(中学高校から日本語専攻で、中国の語学系大学でも日本語学科の特別上級クラスに在籍しているレベルの協定校から来学している学生)と同じクラスで、CALLシステムや同時通訳システムを駆使しての授業が行われている。

学内外における教育システムの効果により、中国語学科において平成28年度卒業生における留学経験者の外国語力スタンダード(中国語)達成率は64.7%となった。また、英語・観光交流文化学科における外国語力スタンダード(中国語)達成者

は、平成25年度卒業生が4.7%であったことに対し、今年度卒業生は13.7%までに伸びた(図2)。

### (2) 英語教育の取組み概要

外国語学部の英語教育は、本学学生の特性に合わせて改良を積み重ねてきたPEPが中心である。1年次には、音声教育を中心に発音・イントネーションを徹底してトレーニングするとともに、自然な英語をできるだけ多く暗唱することで多様な英語表現を内在化させるよう設計されている。これにより、英語を使い楽しむことを体感しながら、4年間の英語学習の素地を整えることに成功している。2年次には、新たに独自開発した教材(PEP#2)を活用し、1年次のspeaking・listening中心教育にwriting・reading教育を融合させる試みを開始した。この教材は、本事業特任教員(英語母語話者)が制作したもので、2年次後期に推奨している海外留学の準備に資するよう、本学で学ぶ留学生へのインタビューをもとにした「異文化理解」をテーマとしている。これにより、外国語学部学生のニーズに合致した英語教育プログラムが整備され、留学前により実践的な語学教育が展開できることとなった。

さらに、長期休暇中には、学修成果の確認とさらなる語学力向上を目指し、「英語合宿」(8月9日・10日)やIELTS対策講座(計6回)を実施し、1、2年次の学生を中心に参加した。いずれも短期集中型のトレーニングメニューが用意されており、研修・合宿後には、語学検定試験において各自の(その時点での)目標をクリアできる者が多く、卓抜した語学力を身につける重要な機会として十分な成果を出している。

### (3) 外国語力を身につけるための環境整備及び取組み

- ① 中国語サロン、英語サロンは、ネイティブス

ピーカーの特任教員や留学生が常駐しており、全学の学生・教職員に開放されている。外国語学部の学生はもとより他学部の学生にも広く利用され、日常的に母語以外の言語でコミュニケーションをとる機会を提供している。平成27年度からは、外国語学部の一部授業科目と語学サロンを関連づける試みが始まったことにより、より一層活発に利用されるようになった。平成28年度に新キャンパスが開設されたことで、全学部学生が三鷹・井の頭という近接するキャンパスで学ぶこととなった。これにより、これまで利用の少なかった医学部や保健学部看護学科の学生が語学サロンを活用しやすくなり、利用者数は延べ6,253名に達し、サロン開室開始年度の約3.5倍までに伸びた(図3)。

② e-ラーニングによる語学学習は、インターネット接続環境にいる限り、時間や空間の制約を受けることなく語学学習を実施できるメリットがある。このe-ラーニングシステムの利用を正課授業の評価基準の一つとして設定し、「1日2時間以上」の活用を推奨したり、長期休暇中の宿題として、また語学検定試験受験に合わせた自習ツールとして利用を促進したりすることで、継続的な利用を担保し学習成果を高めることにつながっている。また、他学部生及び教職員にも利用機会が提供されていることから、全学的な語学学習ツールにもなっている。

③ 学内で海外TVニュース番組(中国語・英語)を常時放映することにより、学修言語に触れる機会を確保し、キャンパスのグローバル環境の維持を図った。学生の交流の場として多くの学生が利用する交流プラザに設置されていることから、自ら意識的にアクセスしなくても、ごく身近で、しかも自然な形で学修言語に接することができるという意味で、留学に近い環境を提供している。

④ 同時通訳演習室は、本事業により設備・備品を整備され、教育環境が充実した。現状では、中国語の通訳演習や、音声同時吹き替えスタイルでのスピーチ発表や演劇発表に多く利用されている。今後は英語学習での活用も推奨し、利用拡大を図ることを目指す。

⑤ 本事業の支援により、学修成果を測定する各種語学検定試験の受験料が減免されている。これまで、TOEIC IP試験は7月と1月に外国語学部全学生を対象に受験を実施。結果スコアは、学生自身の可視化された学修成果としてループリックに記録されているほか、卓抜した語学力を養成する教材や教授法の開発・改良にもデータとして活用されている。

#### (4) 語学力養成の成果分析等……………

「卓抜した語学力」を測定する指標として、語学検定試験(中国語検定、HSK、TOEIC、IELTS等)を活用することとしている。定期的に受験をすることにより、自身の語学力ならびに学修成果を可視化できるだけではなく、語学クラス分けやアカデミックアドバイスの資料としても活用されている。

本事業の支援により、語学教育環境は格段に整備された。平成25年度に外国語力スタンダードを達成した者はわずかに6名(卒業生の2%)にすぎなかったが、本事業開始後に入学してきた者は4年間の就学期間をフルに活用できたことにより、平成28年度の外国語力スタンダード達成者は31名に増加し(図1)、卒業生数の14%を超えるレベルまでに達した。平成28年度語学力スタンダード達成者のうち、海外留学経験者数は約74%(平成27年度は約46%)を占め、本事業の補助期間である5年間の取組みが着実に成果を挙げたことを確認できた。それら語学力養成の成果は、平成28年度においては外国語学部と中国の協定大学が連携して行った合同ゼミナールの成果を報告する企画(平成28年度第7回グローバルシンポジウム)でも確認された。中国と日本の両国において学習言語(中国語・

英語・日本語)を使って研究発表会を開催し、シンポジウム参加者から高評を得た。また、他にも学習した語学力とプレゼンテーション能力を活かすため、学生英語プレゼンテーション大会(GGJ東日本ブロックイベント)にも出場。外国語学部と医学部の学生5人がチームを組み、総合大学としての強

みを活かしたプレゼンテーションを披露した。学内においては、卒業前に「卒業研究報告会」(2月1日)を実施するなど、学修言語を用いたプレゼンテーションを通して、問題発見力・問題解決力・自己表現力を磨く機会を多く設定した。

図1. 学生の卒業時の外国語カスタンダード達成者の推移(外国語学部)

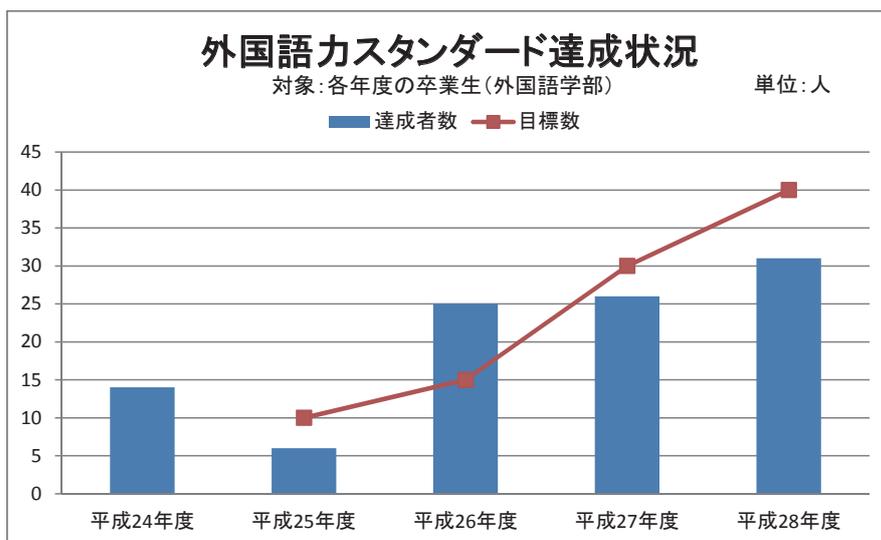


図2. 各年度卒業生の中検4級以上合格者の推移

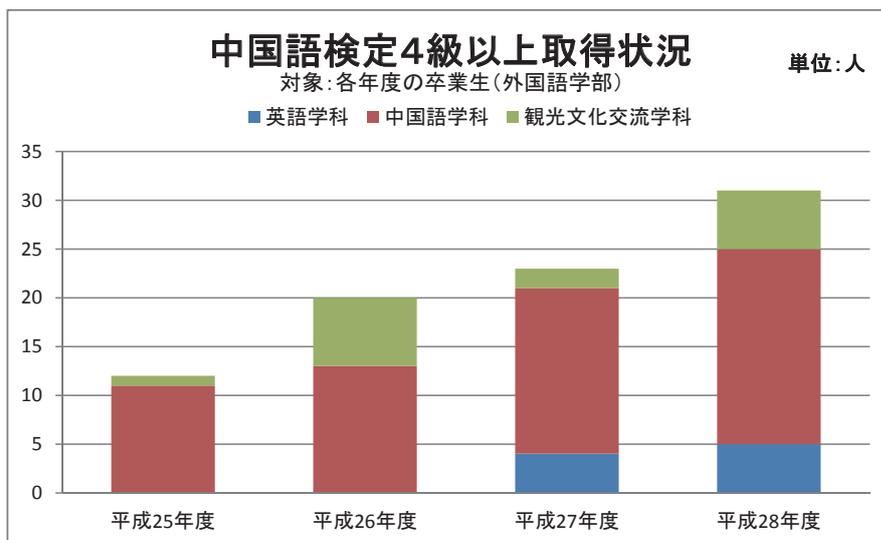
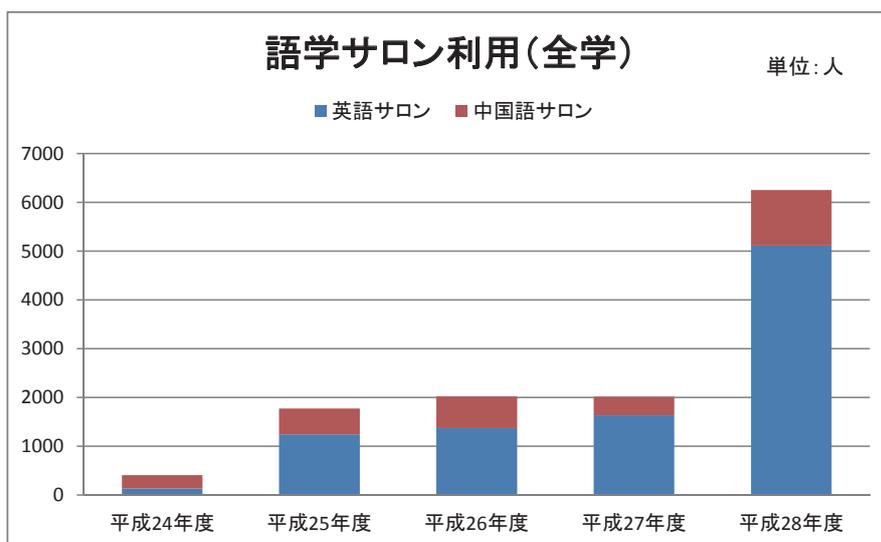


図3. 語学サロン利用状況(年度推移)





### 3. スマートでタフな交渉能力の養成



#### (1) 「スマートでタフな交渉能力」の定義……………

本学が育成を目指している「スマートでタフな交渉能力」を持ち、将来広く世界で活躍する「グローバル人材」の定義は以下の5項目に集約される。

この定義を基に人材育成教育を展開するとともに、その素養を測定・評価する方法としてグローバルルーブリックを開発し運用している。

##### ①卓抜した語学力：日中英トライリンガル

中国語(中国語検定、HSK、通訳案内士)

英語(TOEIC、IELTS)

##### ②知識・理解、汎用的技能(学士基礎力)

GPAの値／文章読解力・文章作成力、定量的スキル／情報リテラシー／学習の統合と応用力／生涯学び続けるための知識と姿勢／社会適応性

##### ③コミュニケーション能力(スマートな交渉能力)

相手の意見をよく聞き理解することができる／相手の立場、意見・考えを尊重したうえで自分の意見をわかりやすく述べることができる／過不足なく明快(論理的)に議論を展開することができる／情報を発信する力／相手に働きかける力／説得する力

##### ④異文化理解とグローバル的視野(スマートな知性)

日本の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解／日本の良さを認識し、それを外国人にも伝えることができる／相手国の歴史、文化、習慣、社会情勢に関する知識と理解／相手国と日本の違いや共通点を認識している／国際情勢、国際政治など時事問題に関する知識と理解

##### ⑤リーダーシップ・コンピテンシー(タフな交渉能力)

チームワーク(規律性、リーダーシップ、自

己の役割の自覚)／全体の意見を調整し最適化を図る能力がある／好奇心と問題発見力・状況把握能力と問題可決力がある／創造的思考、企画・提案力がある／ビジョンをもち、長期的に何事にも真正面から取り組む力がある／自身のストレスをコントロールすることができる

#### (2) アクティブラーニング型教育による「スマートでタフな交渉能力」の育成……………

「スマートでタフな交渉能力」を涵養する場として開設されたアクティブラーニング教室は、学生や教職員の評価が高く、平成28年度は72%の教室稼働実績を上げた。アクティブラーニング教室では主に「ゼミナール」や「基礎演習」等の授業が行われ、PBL(課題設定・解決型学習)や少人数クラスによるアクティブラーニングの拡充を図ることができた。

また、本学の学生と中国の協定大学が連携し、学生による「合同ゼミナール」を実施した。これは共通課題をテーマとしたPBL形式で行われ、本学からは24名の学生が参加。両大学の学生が事前に数回にわたりインターネットによる意見交換等を行った後、実際に相互大学を訪問して協働研究、プレゼンテーション、ディベートを行った。海外の学生と学修言語(中国語、英語)を使い研究推進、成果発表を行ったことは、学生の「スマートでタフな交渉能力」を向上させる契機となった。

#### (3) ルーブリックによる「スマートでタフな交渉能力」の測定・可視化……………

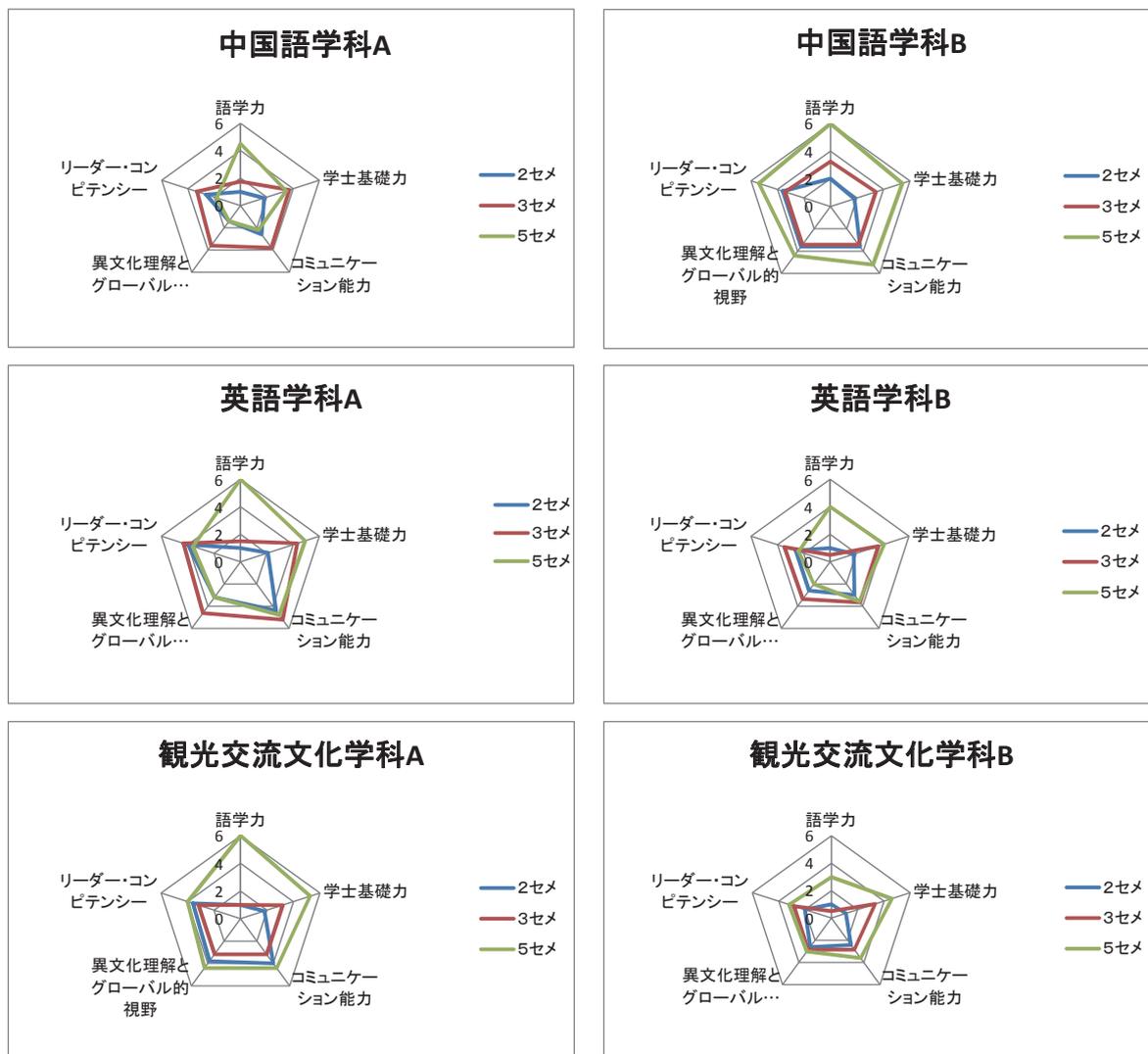
杏林大学が目指すグローバル人材としての成長や学習成果を可視化するグローバルポートフォリオのツールとしてルーブリックを独自開発し、オンラインで運用している。「スマートでタフな交渉能力」に係る各評価項目は、自己評価、教員による

評価ならびに学生同士の評価を加味し、評価測定を行う。

グローバルルーブリックとポートフォリオを併用することにより、学生の「留学による成果」を測定することが可能となり、留学前と留学後で「コミュニケーション能力」や「異文化理解」等に関し、

どのように成長したかを具体的に測定・可視化することができる。評価測定は、大学在学中の4年間の中で、1 Semester（入学時）、3 Semester（留学前）、5 Semester（留学後）、7 Semester（卒業前）の4回実施を行う。

図4. 平成26年度～平成28年度にルーブリック評価を行った学生の例示

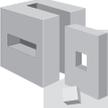


#### (4) 留学帰国者報告会と卒業研究報告会……………

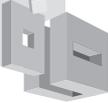
平成28年度も留学帰国者報告会(7月および1月)と卒業研究報告会(2月)を開催した。留学帰国者報告会は、外部評価者や留学生、専門が異なる教員からの質疑応答を通して、スマートでタフなディスカッションができることを確認する機会となっている。参加学生は、十分に時間をかけて準備し、かつ学修言語のみでのやり取りをしなければならぬため苦労は大きいものの、やり遂げた充実感とその学修を推進させる原動力となっているようであり、母語話者による質疑応答に耐え粘り強く説明し切る交渉能力等の上達度を測定することが

できた。外部評価委員からは「話すことによって、継続して語学力を伸ばすことができるため、これからも積極的に言語を使う機会を探してほしい」等のコメントをいただいた。

卒業研究報告会は、大学での学びを完結させるイベントとして毎年2月に実施している(平成28年度は2月1日)。卒業論文で取り扱った研究内容を専攻する言語でプレゼンテーション・質疑応答を行い、大学での学修成果を報告する場である。卒業研究報告の評価は、卒業論文指導者ではない教員が担当し、厳格な指導を行った。



## 4. 学生の留学先となる協定校開拓・交流事業の拡大



### (1) 新たな協定校の開拓……………

平成28年度は中国の上海对外経貿大学、浙江外国語学院の新規海外協定校2校が増え、全体で14か国・地域、54大学・機関と学術交流協定を締結した。中国語圏の協定校は25校となり、北京、上海、天津、大連など中国の主要都市に協定校を広げることができた。また、シンガポール、マレーシアなどの経済発展の著しい国々にも協定校をもつことができたことは、本学が目標としている中国語、英語の両言語の修得を可能とすることができる環境をつくることができた。

同時に英語圏の協定校も増え、本事業の目的である「日中英トライリンガル人材育成」の実現に向け、中国圏及び英語圏の留学先が確保されただけでなく、交換留学、中長期留学など留学制度も充実させ、学生一人一人が自分にあった留学プランを選択できるようになった。

### (2) 平成28年度の交流活動……………

海外協定校とは学生の留学派遣にのみならず、定期的に教員を招聘し、教育交流に関する条件の整備や教員の交流などについて意見交換を行い、お互いの協力体制について確認した。

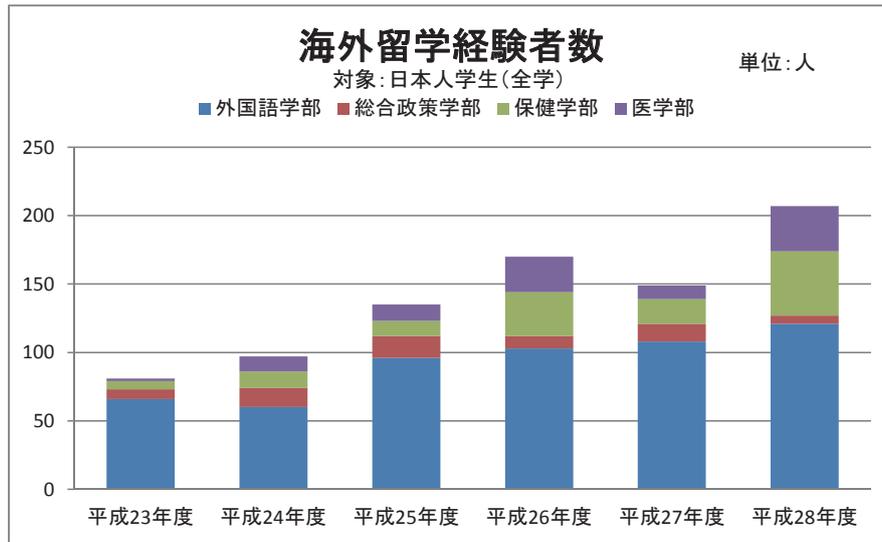
なかでも平成28年度は、中国の協定校である上海外国語大学と本学の中国語学科、英語学科の学生と上海外国語大学の学生が相互に大学訪問しゼミナールレベルでの研究交流プロジェクトを実施した。本学の学生は中国語と英語で、中国の学生は日本語と英語でそれぞれプレゼンテーションを

行い、シンポジウム形式の報告会を行った(平成28年9月第7回杏林大学グローバルシンポジウム「日中の学生協働によるゼミ交流・研究発表 ～杏林大学・上海外国語大学合同ゼミナールによる日中英3カ国語プレゼンテーション～」)。このシンポジウムは、異文化圏の学生との協働を通じ、有意義なコミュニケーションをいかに展開するかということを学ぶ実践的な試みとなった。

### (3) 全学的な海外留学・研修の促進……………

本学のグローバル人材育成は、外国語学部を中心に他学部にも協働を求めるとともに、成果を波及される形で、全学的な事業として積極的に推進された。特に海外留学・研修については、参加する機運が全学的に高まったこともあり、平成28年度は本事業開始前に比べ約2.5倍に増加した(図5)。医学部においては新規プログラムとしてイギリスの協定校であるレスター大学にて、医学英語セミナーを開催し20名の学生が参加した。また、中国の海外協定校が充実したことも影響し、中国語学科における海外留学者は、平成28年度卒業生(日本人学生)の65.4%を占めた。総合政策学部では、経済・国際関係、福祉といった専門科目を英語で学ぶGCP(Global Career Program)が始動。プログラムの中で海外留学を強く推奨していることもあり、次年度以降も新規のプログラム施行に向けた検討を進め、引き続き有益な留学プログラムを構築し、学生の派遣を行っていく。

図5. 海外留学経験者数



学術交流協定大学一覧（平成 29 年 3 月現在）

No.	(国/地域) 協定大学名
1	(香港)香港中文大学
2	(オーストラリア)ウーロンゴン大学 英語センター
3	(イギリス)イーストアングリア大学
4	(韓国)乙支大学校
5	(中国)河北大学
6	(台湾)国立政治大学
7	(ベトナム)ハノイ国立大学 社会科学人文科学大学
8	(韓国)高麗大学校
9	(台湾)南台科技大学
10	(タイ)マヒドン大学
11	(韓国)建陽大学校
12	(韓国)韓瑞大学校
13	(中国)天津外国語大学
14	(台湾)大仁科技大学
15	(アフリカ)ケニア中央医学研究所
16	(中国)ハルビン医科大学
17	(シンガポール)シャータックシンガポール 国際ツーリズムカレッジ
18	(中国)北京第二外国語学院
19	(中国)杭州師範大学
20	(中国)浙江工業大学
21	(中国)北京外国語大学
22	(中国)北京語言大学
23	(中国)大連外国語大学
24	(中国)上海外国語大学
25	(中国)広東外語外貿大学
26	(ニュージーランド) Ara Institute of Canterbury
27	(韓国)国立公州大学校

No.	(国/地域) 協定大学名
28	(中国)東華大学
29	(フランス)オーベルニュ大学 (クレルモン第1大学)
30	(オーストラリア)ディーキン大学
31	(中国)大連大学
32	(中国)北京大学外国語学院
33	(タイ)チェンマイラチャバット大学
34	(イギリス)チチェスターカレッジ
35	(台湾)国立高雄餐旅大学
36	(イギリス)レスター大学
37	(アイルランド)リムリック大学
38	(オーストラリア)アデレード大学
39	(アメリカ)ノーザンアリゾナ大学
40	(オーストラリア)サンシャインコースト大学
41	(アメリカ)ルイスアンドクラークカレッジ
42	(イギリス)ブライトン大学
43	(アメリカ)ポートランド州立大学
44	(アメリカ)オレゴン州立大学
45	(オーストラリア)南オーストラリア大学
46	(台湾)台湾環球科技大学
47	(タイ)コンケン大学
48	(中国)華東師範大学
49	(中国)天津理工大学
50	(マレーシア)ニライ大学
51	(中国)北京大学医学部
52	(アメリカ)ウィッテンバーグ大学
53	(中国)上海對外經貿大学 *平成 28 年度新規協定校
54	(中国) 浙江外国語学院 *平成 28 年度新規協定校

## 5. 平成28年度の海外交流の展開

《6月》

### ウィッテンバーグ大学の今井Brandle先生が本学を来訪

平成28年6月16日(木)井の頭キャンパスに本学の協定校であるウィッテンバーグ大学(アメリカ)の今井Brandleてるみ氏が来訪。

ウィッテンバーグ大学とは平成28年1月に協定を締結し、今回の今井先生の来訪により本学からの学生派遣に向けた具体的話合いを行うことができた。今後、本学の学生の送り出しに向けて引き続き協議を行っていく。



### Victoria University of Wellingtonの教職員が本学に訪問し、EPPcafeを実施

平成28年6月24日(金)に、ヴィクトリア大学ウェリントン校(Victoria University of Wellington)から、Dr. Angela JoeとMr. Simon Hodgeが井の頭キャンパスを訪問し、「EPP café」を実施した。

「EPP café」とは、ヴィクトリア大学へ留学した際に実際に受講するEnglish Proficiency Program (EPP)の体験クラスの一つで、コーヒー・紅茶・クッキーを囲みながら英語学習をするカフェ形式の授業である。

今回は「日本の食べ物とニュージーランドの食べ物」を題材に、形・色・味などの特徴から食べ物を当ててるクイズを、教員と学生または学生と学生で出し合いながら英語の授業を行った。

このカフェは昨年度に引き続き今年度も実施し、2セッションにわたり開かれ、本学学生が合計

22名参加した。ニュージーランドで有名なPeople's CoffeeやWhittaker'sが提供され、ヴィクトリア大学の実際の英語授業を体験した。普段の英語授業とは一風変わったカフェ形式の授業に、参加した学生も積極的に英語で発言する姿が印象的だった。

その後、Dr. Angela JoeとMr. Simon Hodgeはポール・スノードン副学長、エリック・トラウトマン特任講師と会談し、井の頭キャンパスの施設を見学した。



《7月》

### 浙江師範大学(中国)が井の頭キャンパスを訪問

平成28年7月22日(金)に中国の浙江師範大学の教員・研究員など20名の訪問団が本学の井の頭キャンパスを訪れた。初めにスノードン副学長より杏林大学の概要を紹介した後、外国語学部の坂本学部長からグローバル人材育成事業で目指している「日中英トライリンガル」の養成の取組みや外国語学部の教育課程、英語教育システム等について説明した。

次いで訪問団から、浙江師範大学は浙江省にある重点大学で、杏林大学同様「グローバル人材育成」に取り組んでいると概要紹介があった。また、杏林大学での英語による専門科目の実施状況について質問があり、各学部の実施状況、特に今年からスタートした総合政策学部のGCP(グローバル・キャリア・プログラム)について説明したところ、

大変高い興味を示された。さらに学生の卒業後の就職状況についても質問があり、インターンシップや学内における就活シミュレーションの実施、教員とキャリアサポートセンターが連携して学生の就職をサポートしているシステムに関心を示した。

浙江師範大学からは交流協定を締結したいとの申し出があり、学生の相互派遣、留学中の学修の単位認定の方法、ダブルディグリーなどについて検討することとした。

その後のキャンパス見学ではPBL教室、アクティブラーニング教室、中国語サロン、英語サロン、ライティングセンター、同時通訳演習室などを興味深く見学した。



## 《12月》

### CIE Oxford副校長が来訪

平成28年12月1日(木)留学・研修の実施教育機関であるCIE,Oxford (College of International Education, Oxford) から副校長のLuke Murgatroyd氏が来訪された。



1時限目、2時限目の外国語学部英語学科インテンプクラスの授業にて、オックスフォードの歴史や魅力について、レクチャーしていただいた。グループディスカッションの時間も設けられ、学生たちは充実した時間を過ごすことが出来た。その後スノードン副学長、坂本外国語学部長と歓

談され、現在留学中の4名の学生の留学状況の報告などが和やかな雰囲気の中で行われた。

また、2月に行われるオックスフォード研修の参加予定学生との顔合わせも行った。学生にとって、研修や留学をイメージする良い機会となった。

## 《2月》

### 河北大学の副学長一行が本学を訪問

中国、河北大学の楊学新副学長一行が平成29年2月21日(火)、本学を訪問した。楊副学長は教務、学生教育、国際交流を担当しており、今回が副学長就任後初めての本学訪問となった。

平成8年に両校が学術交流協定を締結してから20年目の今年、松田理事長、跡見学長を表敬訪問し、これまでの学生、教職員交流に対する本学の協力へのお礼の言葉が伝えられたことは今後両校が交流活動を続けていく上で大きな意味を持つものとなった。理事長、学長との懇談では、これまでの交流を維持、発展していくことに加え、両国が直面している高齢化、少子化などの社会問題においても医学部、保健学部を設置している両校だからこそ、医学分野などで新たに協力ができることがあることを確認した。

その後、井の頭キャンパスに場所を移し、保健学部診療放射線技術学科山本教授の説明により授業で使用する医療機器を見学した。実際の機器により実習できる授業環境が整えられていることに感心された様子であった。その他、図書館、国際交流センター、同時通訳演習室の見学も行い、最新機器を備えた施設に興味を示された。

今回の訪問では、これまでの両校における交流を更に活発化させるだけでなく、新たな分野での交流も始めていくことを確認することができた。



## 6. 学生の海外留学・研修の促進および支援体制

在学生の海外留学の活性化を目指し、留学プログラムの一層の充実を図ると共に、学生の動機づけの促進や、留学中のサポート、帰国後の報告会などを通して留学支援体制の強化を図った。

### (1) 留学の動機づけや留学を促進するための取組み

#### ① 留学関係冊子の発行

留学案内誌『Study Abroad』を編集し、留学ガイダンス・個別相談時に随時配布を行い、学生へ留学の全体像を鮮明にすることができた。また、『留学ハンドブック』では、渡航準備から留学中の危機管理等の情報を総合的にまとめ、スムーズな海外生活となるようサポートすることができた。



#### ② 留学フェアの実施

全学部の学生対象に留学促進を目的とした留学フェア(平成28年4月14,15日、平成28年9月28日)を実施した。留学先別に留学経験者が相談席に座り、留学希望者の留学における金銭面や留学環境など細かい相談に応える。留学未経験者は留学に対する疑問・不安を解消し、学生生活における留学経験の有益さを、留学経験者を通して知ることができ、留学への意識を高める重要な取組みとなっている。



#### ③ 留学ガイダンス・オリエンテーションの実施

ガイダンスを通して、留学の説明・動機づけを深めることができた。また、出発前指導や海外危機管理オリエンテーションを実施し、海外での生活・学業に万全の態勢で取り組める様に指導を行った。また、海外危機管理オリエンテーション(平成28年7月23日、平成29年1月21日)を開催するなど、より安全な留学を目指した支援の拡充も留学促進を後押ししている。



#### ④経済的支援

学生の海外研修・留学に対し、大学独自の学費減免制度や奨学金制度に加え、国の特別政策枠(海

外留学支援制度(短期派遣)奨学金)等の適用により、継続して経済支援を行い、留学促進に繋げることが出来た。

奨学金制度	受給者数						
奨学金制度 (留学先の授業料減免)	9名						
留学中の学費減免制度 (杏林大学への学納金80%減免)	平成28年春季学期適用 15名 平成28年秋季学期適用 45名						
杏林大学海外研修・留学奨学生 (給付額) 1年間(長期)留学・・・40万円 半年間(中期)留学・・・20万円 5～8週間海外研修・・・10万円 2～4週間海外研修・・・5万円		医学部	保健学部	総合政策学部	外国語学部	国際協力研究科	計
	1年間	—	—	—	10	—	10
	半年間	—	—	—	22	—	22
	5～8週間	—	—	—	—	—	0
	2～4週間	17	12	—	10	—	39
	計	17	12	0	42	0	71
海外留学支援制度(短期派遣)奨学金 (独立行政法人日本学生支援機構)	短期研修・研究型 7名						

## (2)サポート体制・・・・・・・・・・・・・・・・

### ①留学のためのサポート

海外研修や留学先に渡航する前に、本学に設置している語学学習システム(語学サロン・ライティングセンター等)を用い、事前学習を行った。

海外研修では引率教員が同行し、現地での生活・学業面でのサポートを行い、中長期留学では海外危機管理対策実施団体と連携し、24時間体制で電話によるフォローが可能な体制を敷いている。また、緊急連絡網や危機管理マニュアルの構築も行った。

### ②留学成果測定の実施

ポートフォリオシステムにて留学中の報告書類をウェブ上で提出するシステムを構築し、学生がシステム上で留学の振り返りが出来るようになった。

また、本システムにてグローバル人材としての到達目標、学習達成度の測定をし、留学前後の成

果測定が可能となった。平成26年度入学者の3年間の自己評価の比較により、語学力、知識、コミュニケーション、異文化理解、リーダーコンピテンシー等の項目で身に着けるべき素養、目標を明確に確認することが出来た。

### ③授業配信による帰国後の就職活動への配慮

キャリアサポートセンター(就職支援部門)と国際交流センターが連携して、留学中の学生に対しては、インターネットを通じて定期的に連絡を取り、就職に関する情報提供や進路相談、エントリーシートに関するアドバイス等を行うと同時に、本学外国語学部のキャリア支援に関する授業「キャリア指導」や「キャリア指導ガイダンス」のネット配信事業を実施した。また、海外で事業展開しているグローバル企業3社から「グローバル人材育成の現状」「求めるグローバル要素」等を意見交換する会も開催され、教育プログラムや就職支援活動等に反映することが出来た。

**(3) 留学・海外研修派遣実績／海外留学経験者就職実績**……………

派遣プログラムの多様化を図り、新たな留学先(協定校)へ学生を派遣することができた。

- ・東華大学 11ヶ月留学(中国・上海)
- ・リムリック大学 4ヶ月留学  
(アイルランド・リムリック)
- ・レスター大学 9日間の医学英語セミナー  
(イギリス・レスター)

協定校や提携校、さらに私費留学者も含め、3か月以上の留学参加者は、79名であった。同時に海外研修も積極的に拡充し、医学部のクリニカルクラクシップも含め、海外研修は23プログラム、160名が参加した。日本語や日本文化を海外へ発信するSENDプログラムの一環として行われたAra Institute of Canterbury (ニュージーランド)やテ

キサスA&M大学(アメリカ)で行われた日本語インターンシップでは、現地日本語クラスのアシスタントや日本語を学ぶ学生との交流、日本の食文化のプレゼンテーションの実施等、充実した成果を上げることができた。上海インターンシップでは、4名の外国語学部学生が不動産会社、観光高層ビルでのアテンド、服飾商社で中国語を使用し現地企業でのインターンシップを行い、高い評価を受けてきた。本事業でインターンシップ、留学、海外研修へ学生を参加させた結果、平成28年度卒業生就職者181名の内、61名がグローバル企業への就職を果たした。

また、本事業が重点的に取り組んでいる外国語学部学生の海外研修・留学促進の流れは、着実に浸透し、医学部のレスター大学医学英語セミナーを始めとし他学部にも波及した。

## 平成28年度 留学実績

留学先	国・地域	実施日程	期間	人数
ビクトリア大学	カナダ	2016.4.2~2016.7.31	4ヶ月	4
ウーロンゴン大学	オーストラリア	2016.4~2016.12	9ヶ月	1
リムリック大学	アイルランド	2016.4.10~2016.8.2	4ヶ月	1
高麗大学校	韓国	2016.8~2017.6(交換)	11ヶ月	-
韓瑞大学校	韓国	2016.8~2017.6(交換)	11ヶ月	-
香港中文大学	香港(中国)	2016.8~2017.5(交換)	8ヶ月	1
政治大学	台湾	2016.8~2017.7(交換)	11ヶ月	1
カリフォルニア大学アーバイン校	アメリカ	2016.9.27~2017.3.26	6ヶ月	4
ポートランド州立大学	アメリカ	2017.3.27~2017.8.20	5ヶ月	-
オックスフォードインテンシブプログラム	イギリス	2016.9.15~2016.12.19	3ヶ月	1
		2016.9.15~2017.2.13	5ヶ月	3
チチェスターカレッジ	イギリス	2016.9.11~2016.12.19	4ヶ月	1
		2016.9.11~2017.2.13	5ヶ月	5
トロント大学	カナダ	2016.8.28~2016.12.19	4ヶ月	4
アラ インスティテュート オブ カンタベリー	ニュージーランド	2016.8~2017.7(交換)	11ヶ月	1
		2016.9.10~2016.12.24	4ヶ月	2
		2016.9.10~2017.2.26	6ヶ月	3
クイーンズランド大学	オーストラリア	2016.8.27~2016.12.18	4ヶ月	4
ディーキン大学	オーストラリア	2016.9~2017.3	6ヶ月	7
		2016.9~2017.8	11ヶ月	1
サンシャインコースト大学	オーストラリア	2016.9~2017.2	5ヶ月	-
		2016.9~2017.7	10ヶ月	-
南オーストラリア大学	オーストラリア	2017.3~2017.8	5ヶ月	5
北京外国語大学	中国	2016.9~2017.7	11ヶ月	-
上海外国語大学	中国	2016.9~2017.1	5ヶ月	4
		2016.9~2017.7	11ヶ月	1
		2016.9~2017.7(交換)	11ヶ月	-
		2017.2~2017.6	5ヶ月	3
		2017.2~2018.1	11ヶ月	6
北京第二外国語学院	中国	2017.2~2018.1(交換)	11ヶ月	1
		2016.9~2017.1	5ヶ月	-
		2017.2~2017.7	5ヶ月	1
広東外語外貿大学	中国	2017.2~2018.1	11ヶ月	2
		2016.8~2016.12	5ヶ月	-
		2016.8~2017.6(交換)	11ヶ月	1
北京語言大学	中国	2017.2~2017.6	5ヶ月	2
河北大学	中国	2017.3~2018.1(交換)	11ヶ月	1
大連外国語大学	中国	2017.3~2018.1(交換)	11ヶ月	-
東華大学	中国	2017.3~2018.1(交換)	11ヶ月	2
天津外国語大学	中国	2017.3~2018.1(交換)	11ヶ月	1
チェンマイラジャバット大学	タイ	2017.3~2018.1(交換)	11ヶ月	-
コンケン大学	タイ	2016.8~2016.12	4ヶ月	-
ニューカッスル大学(私費留学)	オーストラリア	2016.8~2016.12	4ヶ月	-
KAPLAN INTERNATIONAL(私費留学)	アメリカ	2016.4~2017.3	12ヶ月	1
California State Polytechnic University, Pomona(私費留学)	アメリカ	2016.9~2017.3	6ヶ月	1
南台科技大学(私費留学)	台湾	2016.9~2017.3	6ヶ月	1
IDEA CEBU(私費留学)	フィリピン	2017.2~2017.8	5ヶ月	1
		2017.3~2017.7	4ヶ月	1
				79

## 平成28年度 海外研修実績

研修名	国・地域	実施日程	期間	人数
ニューカッスル大学研修	オーストラリア	2016.8.20~2016.9.11	23日間	6
ニュージーランド日本語教育インターンシップ	ニュージーランド	2016.8.20~2016.9.11	23日間	4
マレーシアインターンシップ	マレーシア	2016.8.16~2016.9.11	27日間	-
南台科技大学研修(外国語学部扱い)	台湾	2016.8.22~2016.8.29	8日間	22
バンクーバー研修(保健)	カナダ	2017.3.12~2017.3.26	15日間	22
クイーンズランド大学研修(保健)	オーストラリア	2017.3.12~2017.3.26	15日間	22
ブライトン大学研修(保健)	イギリス	2016.8.27~2016.9.4	9日間	11
リージス大学研修(保健学部)	アメリカ	2016.9.2~2016.9.18	17日間	10
台湾研修	台湾	2016.9.11~2016.9.19	9日間	4
上海インターンシップ	中国	2016.8.30~2016.9.2	4日間	12
アメリカ日本語教育インターンシップ	アメリカ	2016.8.21~2016.9.3	14日間	4
オックスフォード研修	イギリス	2017.2.19~2017.3.7	17日間	3
ロサンゼルス研修	アメリカ	2017.2.23~2017.3.13	19日間	5
タイ研修	タイ	2017.2.26~2017.3.13	16日間	10
タイ研修	タイ	2017.2.3~2017.2.13	11日間	13
医学英語セミナー レスター大学(医)	イギリス	2017.2.20~2017.3.10	19日間	20
Waterfront and Solent surgery(医)	イギリス	2017.2.20~2017.3.10	19日間	20
Northshore University Health System(医)	アメリカ	2016.4.4~4.28	25日間	2
Northshore University Health System(医)	アメリカ	2016.4.4~4.28	25日間	2
Stony Brook University School of Medicine(医)	アメリカ	2016.5.9~6.3	26日間	5
Stony Brook University School of Medicine(医)	アメリカ	2016.4.4~4.28	25日間	1
Stony Brook University School of Medicine(医)	アメリカ	2016.4.4~4.28	25日間	1
Hvidovre Hospital(医)	デンマーク	2016.4.4~4.28	25日間	1
Charles University The Medical School in Pilsen(医)	チェコ	2016.5.9~6.3	26日間	1
北京大学付属医院(医)	中国	2016.4.4~4.28	25日間	1
				160

#### (4) 留学報告

##### 上海外国語大学留学体験記(中国)

外国語学部 中国語学科 笹川 瑠美奈  
(2016年9月～2017年1月)

上海で過ごした4ヶ月間はとてもあっという間で貴重な日々でした。上海に着いたときは今日からまだ130日以上もここで過ごすのかと少し不安にもなりましたが、違う環境で暮らすことに楽しみな気持ちもありました。授業が始まるまではまだ留学に来たというよりは、観光客気分ですら上海のいろんなところを巡りました。そして外灘を初めて見たときは、ここに来てよかったと思いました。授業はクラス分けテストがありそれから始まりました。私のクラスにはインドネシア、ポーランド、韓国、フランス、ロシア、イタリアなどの国から来た人がクラスメイトにいました。想像はしていたけれど、いざクラスに入り授業が始まると先生はもちろん全部中国語で授業が進むので聞き取るのも難しく、もっと基礎をしっかり復習しておけばよかったと思いました。特にリスニングの授業は、グループワークが多くクラスメイトと中国語で会話をするのが大変でした。いざ話すとなるとなかなか言葉が出てこないことが多くあり、うまく伝えられないこともありました。しかしクラスメイトはみんな優しい方々ばかりで、私になんて答えてよいかわからない時や内容がよくわからない時もわかりやすく教えてくれました。

学校では新入生歓迎会や運動会、年末には新年会などが行われて行事がたくさんあったのが面白かったです。新入生歓迎会では生徒が多く参加しているので、普段はクラスメイト以外あまり関わりがなかったのですが、そこで友達が増えて嬉し



かったです。

宿泊する寮は第一希望のところは満員で入れず、大学から少し離れているところになり、最初の頃は残念だと思っていたのですが、周りに飲食店や寮の隣には24時間空いているコンビニもあり、最寄りの駅からも歩いて5分くらいの場所に位置していたので非常に便利でした。大学から少し歩いたところには大型ショッピングセンターもあり、そこには有名なブランドや大きなスーパーがあったので、よく買い物に行っていました。外に出ると中国語を使う機会が増えるので勉強になることも多かったです。留学当初、特にご飯を食べる時は注文がうまく伝わらないこともあり、頼むたびに少し緊張しましたが、慣れてくると1人で出かけることも増えてきました。

上海にいるときは全てが勉強になり、日本にいたら決して体験できないことばかりでした。中国語は難しかったですが、少しでも伝わるととても嬉しくまた頑張ろうと思えました。留学で学んだことをこれからの残りの大学生活でも活かしていきたいと思っています。そして留学中に会った友達とももっと交流を深めたいので、語学力を向上させるために大学でさらに中国語を頑張りたいです。



## カリフォルニア大学アーバイン校留学体験記(アメリカ)

外国語学部 英語学科 小茂田 紗希

(2016年9月～2017年3月)

I went to study abroad at UC Irvine in the USA, September 27 to March 26. First, I will talk about Irvine. Irvine is a safe city and has good weather. I think it is easy to live in. There are a lot of beautiful beaches close to Irvine, so you can go to beaches easily after school or weekends. I went to beaches with my friends after school and weekends, and I could see beautiful sunsets. If you see it, you can relax. Next, I will talk about homestay. My host family is American, so I was able to learn American culture too. There were a host mom, two brothers and one sister. My host mom was so kind. She made me delicious dinner every day. She took me many places such as movie theaters, sports games and shopping centers. My host brother was six years old and my host sister was seven years old. My host brother was so funny. They always came to my room, and they said “let’s play game together and let’s dance together”. And more, we watched movies and ate dinner every day. I had a fun time with them. In addition, there were Thanksgiving and Christmas parties. My host mom invited me to them, so I could eat traditional American food and meet their relatives. Third, I will talk about school. I had three classes from 8am to 2pm. I studied grammar, writing, speaking, listening and reading classes. In addition, I was able to improve presentation skills too. I gave a lot of presentations for six months. For example, my favorite place, city, picture, movie and more. I did not like giving presentations in English too much, but I gave presentations over and over. I like to give presentations in English now. Then the exchange students at UCI were from a lot of



different countries. I was able to make a lot of friends. My classes were so fun. There were Chinese, Korean, Taiwanese, Saudi Arabian, Kuwaiti, Turkish people. I learned a lot of different culture from my friends. Especially, people that left the biggest impression on me was Arabic people. They really love their country, songs and food. I thought they were scared of me, but they were so kind and funny. They like to learn Japanese and Japanese culture. I taught them Japanese culture and Japanese, such as politeness, four seasons, foods, famous places and so on. They taught me their culture and their languages like religions, family, foods and so on. We taught our cultures each other. In addition, my Arabic friends took me to Arabic restaurants. I ate Arabic foods with my hands for the first time. It was so delicious and I will never forget it. I had valuable experiences from my friends. In conclusion, I went to study abroad because I wanted to improve my English skills. Of course, I was able to improve my English skills. I was able to meet really great friends. And more, I could learn a lot of different country’s culture from my funny friends. I hope to see my friends again. I am grateful for my parents, host family and my friends. I had a great time in Irvine.



## 上海インターンシップ体験記(中国)

外国語学部 中国語学科 青木 真瑚

(2016年8月21日～2016年9月3日)

2016年8月23日から上海環球金融中心観光庁(森ビル)にてインターンシップ研修に参加しました。私の他に拓殖大学から二名来ていました。22日当日は3人で責任者の日本人の方に挨拶をした後、支給された制服に着替えてそれぞれ中国人の現場担当の方に連れられ仕事場へ行きました。1人は低層のフロント勤務、私ともう1人の方は高層100階で記念撮影と記念写真の販売に配属されました。ちなみに3人一緒の時間に勤務したのはこれが最初で最後の日でした。

仕事についての説明を聞いているとき、中国人の担当の方が喋る中国語が早くて、何を言っているのか本当にさっぱりわかりませんでした。少し聞き取れる単語をつないでこういう意味かな、と推測することしかできずこれから先やっていけるのか心配で不安を覚えました。

100階で働いていたのは20代前半の学生を卒業したての方ばかりでした。まずは仕事をどう進めていくのか同僚の人についていき仕事の手順などを説明してもらいましたが、彼が何を言っているのか本当にわからず会話が成立していない場面もありました。ですが同僚の方たちはとても親切で



何を聞いても嫌な顔をせず教えてくれてたいへん感動しました。

私が主に行った仕事内容は記念撮影の勧誘、記念撮影するお客様の写真撮影、お客様の映る位置の配置、また隣のカウンターで写真販売、などをしていました。最初は慣れないことも多くまた聞き取れないこともあったので、どういう意味なのか説明してもらったり同僚の人に持参のメモ帳にわからない単語を書いてもらったりしていました。最初は全然聞き取れなかった中国語も聞き取れるようになっていくのを実感しました。留学中は若い世代の若者言葉が聞き取れずとても苦手だったのですが、このインターンシップで克服することができました。また、ある程度中国語を聞いた時に地名や固有名詞が漢字として頭に浮かんで少しだけ認識できるようになったことが、今回の大きな成長点だと思います。

## (5)プログラム修了プレゼンテーション……………

### [春学期開催]

実施日：平成28年7月9日(土) 9時20分～12時15分

場 所：井の頭キャンパス F棟211交流プラザ

司 会：(英 語)坂本 ロビン教授

(中国語)宮首 弘子准教授

評価委員：中国外交部 張 智浩 氏

McCartney Jonathan特任講師

発表学生：35名(中国、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、アメリカの5ヶ国・地域)



評価委員2名の先生を迎え、5ヶ国への留学・海外研修帰国者、計35名の学生がプレゼンテーションを行った。報告会では、どのグループも留学先の言語を使用し、留学先などでの写真を織り交ぜたスライドを提示しながら発表を行った。

講評において、McCartney Jonathan特任講師は、「発表したグループの中にはアイコンタクトや感情を込めたプレゼンテーションを行った学生達もおり、また多くのプレゼンテーションから学生達にとって留学体験がいかに重要な体験となり、その経験から多くの事を学ぶ事ができたかが分かる素晴らしいプレゼンテーションでした。」というメッセージを学生に送った。

### [秋学期開催]

実施日：平成29年1月7日(土) 13時～16時20分

場 所：井の頭キャンパス F棟211交流プラザ

評価委員：遠藤 絢特任教授

Ying Allen特任助教

司 会：(英 語)坂本 ロビン教授

(中国語)宮首 弘子准教授

発表学生：23名(中国、台湾、イギリス、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア6ヶ国・地域)



評価委員2名の先生を迎え、6ヶ国及び地域への留学・海外研修帰国者、計23名の学生がプレゼンテーションを行った。報告会では、どのグループも留学先の言語を使用し、留学先などでの写真を織り交ぜたスライドを提示しながら発表を行った。

講評において、遠藤特任教授は、「留学をして、外から日本を見つめなおす良いきっかけとなったと思います。これから中国へ留学するみなさんにとって、今日の先輩たちの発表はとても参考になったのではないのでしょうか。次回の報告会も楽しみにしています。」と学生に激励の言葉を送った。

## 7. 学生・教職員のグローバル力育成

### (1) グローバルセミナー (学生対象) ……………

学生の国際理解、国際力育成を目的としたグローバルセミナーを開催した。

#### 第19回グローバルセミナー「English for Communication in Multicultural Societies」

実施日：平成28年7月27日(水)

講演者：Paul Fairclough氏

場 所：井の頭キャンパス F棟211交流プラザ

参加者：学生17名、教職員15名

「English For Communication in Multicultural Societies」と題し、本学の協定校であるタイ国コンケン大学から講師のPaul Fairclough先生をお招きし、多文化社会における英語によるコミュニケーションの役割や教授等について模擬授業形式でお話しいただいた。

はじめにFairclough先生自身が英国から現在8年間教鞭をとっているコンケン大学へ渡った話をした後、自己紹介・他己紹介に用いる事ができる英語の穴埋めクイズを参加者全員で行った。その後コンケン大学の紹介ビデオを上映し、英語の聞き取り、観察力、記憶力等を確認するQ&Aを行い、コンケン大学の紹介を通して参加者との交流を図った。

最後に、コンケン大学にてFairclough先生が教えるTESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages) という英語が母国語ではない人々向けの英語教授法を学ぶコースの受講者である1年生の学生が今回のセミナーテーマでもある「English for Communication in Multicultural Societies」というテーマで行ったプロジェクトのプレゼンテーション映像を上映した。このプロジェクトは、自国(タイ)と学生が選択した他国との文化についてリサーチを行い、その相違点について英語でプレゼンテーションを行うという内容であった。Fairclough先生は第二外国語によるプ



レゼンテーションの注意点として、原稿の読み上げという点にふれ、まずは短い発表内容を暗記し、自信を持って発表することが重要であると述べた。プレゼンテーション映像では学生が食事、挨拶、名前の由来についてタイと日本の違いについて、原稿を見ることなく生き生きと発表する姿が映し出された。

出席者から講演の内容について「大変良かった」とのコメントを多数いただき、出席した学生の中には「自分と同学年の学生が原稿を見ずに素晴らしい英語でプレゼンをする姿に刺激を受けた」等のコメントもあり、今後本学の更なるグローバル化に向け大変有意義なセミナーとなった。

#### 第22回グローバルセミナー「The Gaelic Athletic Association (Traditional Irish Sports)」

実施日：平成28年12月14日(水)

講演者：Maura Casey氏

場 所：井の頭キャンパス F棟211交流プラザ

参加者：学生22名、教職員11名

「The Gaelic Athletic Association (Traditional Irish Sports)」と題し、本学の協定校である、アイルランド リムリック大学から講師のMaura Casey先生を招き、アイルランド独自のスポーツ文化について、アイルランドの伝統スポーツを統



括するゲーリック体育協会の説明を交えて紹介頂いた。

はじめに、アイルランドの伝統的なスポーツの保全、そしてアイルランド国民のレクリエーションの機会提供を目的として、先生の故郷である Tipperary に 1884 年に設立された協会であるゲーリック体育協会について説明して頂いた。現在世界中に日本を含めた 2200 の協会所属の団体があり、ゲーリック体育協会の影響力の高さに参加者全員が真剣な面持ちで耳を傾けていた。

後半には Casey 先生がアイルランド本国から持参した Hurley と Gaelic Football 2 つのスポーツ道具を使い、実際にプレーの仕方を体験した。両スポーツの紹介を通して、スポーツ文化の奥深さを学び、参加者は自国の文化や伝統の重要性について再確認することができた。

出席者からは、講演の内容について「大変よかった」という声が多数上がった。参加した学生からは「英語がわからない場面もあったが、実演もあり、とてもわかりやすかった」、「アイルランドのスポーツや文化について、知らなかったことを学ぶことができ、見識を広げることができた」などのコメントが寄せられた。学生にとって広い見識とグローバル素養を身に付ける事の重要性を改めて認識することのできたセミナーとなった。

## (2) グローバルシンポジウム……………

日頃の教育成果を学内外に示すとともに、異文化圏の学生との交流を通じ、語学力はもとより異文化を理解し交流を行うコミュニケーション能力のアップを目的としたグローバルシンポジウムを開催した。

### 第7回グローバルシンポジウム「日中の学生協働によるゼミ交流・研究発表 ～杏林大学・上海外国語大学合同ゼミナールによる日中英3カ国語プレゼンテーション～」

実施日：平成28年9月10日(土)

場 所：井の頭キャンパス F棟208同時通訳演習室

参加者：本学学生、教職員、一般来場者等計73名

杏林大学と上海外国語大学教員による報告・講演のほか、両大学の学生が相互に大学を訪問してゼミレベルでの交流を行い協働で研究・議論した結果を、杏林大学の学生は英語と中国語で、上海外国語大学の学生は英語と日本語でそれぞれプレゼンテーションした。



### 第1部 基調報告

杏林大学の坂本ロビン外国語学部長と宮首弘子外国語学部教授より、今回行った上海外国語大学との合同ゼミナールの活動を行うに至った経緯について、また、外国においてその国の言葉や外国語を使い研究を行う意義について報告した。



## 第2部 学生によるプレゼンテーション

### (1) 杏林大学 英語学科の学生グループの英語によるプレゼンテーション

**グループ1** 「Education in Japan」をテーマに英語による発表を行った。日本の教育について、小学校、中学校、高等学校、大学の4つの過程で行われる行事での喜び・発見・責任感が、自己管理など社会性を身につけるための重要な役割を果たしていると発表した。

**グループ2** 「正しい日本語を覚える」というテーマで、日本でよく使われる「すみません」「大丈夫」「よろしくお願ひします」について、3つの言葉にはそれぞれいくつかの意味があり、日本語の難しさ、またその用法についてスキットも交えながら英語で説明をした。



### (2) 上海外国語大学日本文化経済学院の学生の英語によるプレゼンテーション

**学生1** 「中日関係のために如何にソーシャルメディアを利用するか」というテーマで、鑑真の渡日

と仏教の伝来の話題に遡り、「その時代には両国がお互いを知るすべがなかったため受入れられるまでに多くの困難があったが、今日ではニュースやインターネットなどの情報により、予めお互いを知ることによって親善を深め文化等の相互理解が可能である。」と述べ、そのツールを用いることの重要性を述べた。

**学生2** 「中国大学生の生活について」というタイトルで、中国の大学での一般的な寮生活、食、アクティビティについて発表し、寮での友情が学習面生活面においてお互いを成長させることを生き活きと伝えた。

### (3) 杏林大学中国語学科の学生グループの中国語によるプレゼンテーション

**グループ1** 「日本における就職活動について」というテーマで、企業の求人は情報会社から提供され、杏林大学のキャリアサポートセンターが学生に対し服装等についての指導、面接指導などを行い就職が決定するという実態を中国語で説明した。

**グループ2** 「日本人学生のライフスタイルについて」というテーマで、先ほどの英語による中国学生の生活の紹介に応える形でキャンパス生活(クラブ活動)、アルバイト活動、ボランティア活動、また流行語やSNSなど日本人学生を取り巻くライフスタイルについて中国語で発表した。

### (4) 上海外国語大学日本文化経済学院の学生の日本語によるプレゼンテーション

**学生1** 「中国の大学生から見た日本のイメージ」というタイトルで、日本の印象をスライドで説明した。近年の日本文化として人気の高いアニメ、漫画などは輸出文化の一つであり、それらを通して中国では日本旅行が大人気であること、彼女が宮崎駿の映画が好きでジブリ美術館の近隣に留学出来た喜びを伝えた。

**学生2** 「日本語の勉強法について」というタイトルで「独り言」で語学の上達をはかることについて発表した。恋心を伝えたり発表を行う際にも人前では恥ずかしいので、何度も繰り返し独り言で映画を見た感想や景色を言葉で描き出して練習をし、その結果自分に自信を持つことが出来るよう

になったと自身の体験から独り言での勉強法が有効であったと述べた。

### 第3部 講演

上海外国語大学の凌蓉副教授および徐旻副教授から、上海外国語大学が目指すグローバル人材の育成の取組みと上海外国語大学と杏林大学の交流についての講演があった。

上海外国語大学と杏林大学は平成21年に学術交流協定を締結し、平成23年からは交換留学生や私費留学生の派遣、受入を行っており、近年では双方の大学で学んだ学生が社会で活躍する姿を目にするようになったこと、先日の「天皇陛下のお気持ち表明のお言葉」が中国のTV番組でも中継された際に、上海外国語大学在学中に杏林大学に留学した卒業生が同時通訳を行い、また特別番組でもコメントを述べたこと等を紹介した。今回のシンポジウムを含め、今後お互いの学生の成長、大学の発展のためにも交流を深めていきたいと述べた。本シンポジウムには、本事業の第三者評価委員である横河電機株式会社社友の内田勲委員にも参加いただいた。内田委員からは、「本日のシンポジウムに参加して本当に良かった。世界には様々な問題があるが、このような日本と中国の若者が力をもって活躍するならば、将来は明るいものになるという確信を得た。」との感想をいただいた。

#### (3) 国際交流の集い.....

国際交流の集いは、学内の国際交流促進を目的に、外国人留学生と日本人学生、教職員が授業以外の場で一堂に会し、交流を深める機会を持ってもらおうと国際交流センターが毎年2回開催している。

#### 夏の国際交流の集い

実施日：平成28年7月6日(水)

この日の交流の集いには、留学生43名を含め学生105名、教職員36名、総勢141名が参加した。司会は学生3名により、日本語(唐詩さん)・中国語



(松島朋美さん)・英語(村田剛さん)の3ヶ国語で行われた。

開会にあたり、松田副理事長は新キャンパスに留学生を迎えることが出来たお礼と、昨今の世界情勢から利害衝突を避けるためには直接会ってお互いを理解し合い、そのためにはこの国の言葉を学んでその国の言葉で話すことが大切であると述べ、また留学生に対しては短い期間での留学で大いに日本の事を学んで交流を深めて貰いたいと述べた。

跡見学長は国際交流の集いを交流を深める日として位置づけ、杏林大学の教育目標の3本柱である日本語・中国語・英語を習得して、文化や歴史をお互い深く理解しあい共有し合うことで日中英のトライリンガルとして活躍をしてほしいと述べた。

続いて英語学科3年の横田菜摘さんと中国語学科3年の今川忠対勲さんが留学についての発表を行った。オーストラリアに留学していた横田さんは英語、中国に留学していた今川さんは中国語でスピーチを行い、今川さんのスピーチでは中国語学科の曹晨晨さんが日本語通訳として参加した。

昨年9月から今年2月までサンシャインコースト大学に留学した横田さんは、オーストラリアでの経験について、English for Academy Purpose (EAP)コース参加で多国籍の学生の中で英語を使わざるを得ない状況が幸いし、自信の無かった語学力が大いに改善し、また暖かく迎え入れてくれたホストファミリーや友達の支えがありこの留学

が素晴らしいものになったと述べ、留学経験を今後も活かしていきたいと語った。

続いて、北京第二外国語学院に留学した今川さんは中国での経験について、留学当初は授業内容も先生のギャグも理解できず辛い毎日であったが、毎日リスニングと単語の音読を繰り返し、中国の学生との交流を重ねていくうちに3ヶ月後には授業を聞き取れるようになったと述べた。夏休みや年末の中国旅行では中国の広大さと文化の多様さを実感し、この留学で中国語の上達とともに精神的に大きく成長できたと述べた。

スノードン副学長による乾杯の発声で歓談に移り、参加者がそれぞれ交流を深めた後、着物専門店まるやま様によるご協力を得て着付けショー、マジック研究会によるパフォーマンス、国際交流会によるクイズ大会が行われ、国際交流センター長の塚本慶一先生の挨拶を以て閉会となった。今回は新キャンパスで初めての国際交流のつどいであり、本学の留学生と日本人学生および教職員が楽しく会話する場面が多く見られ、会場は大いに盛り上がりさらに交流を深めることが出来た。



## 冬の国際交流の集い

実施日：平成28年11月30日(水)

今年度2回目の開催となったこの会は、クリスマスに彩られ、留学生16名を含む学生74名、教職員31名の総勢105名が参加した。今回は、総合政策学科3年の鈴木涼介さん、中国語学科3年の今川忠

対勲さんと、留学生の国際協力研究科の翟鵬瑶さんの司会により、英語・中国語・日本語の3カ国語で進められた。

開催にあたり松田副理事長から挨拶があり、留学生に向けて「新しいキャンパスで日本人と文化の交流をはかり、将来相互の国の架け橋となるよう頑張ってもらいたい」と述べた。

また跡見裕学長からは、国際交流について、AI(人工知能)による翻訳が可能な現在においても相手国の考え方・文化・歴史を学び、本当の意味での言葉を通じた交流をしてほしいと挨拶があった。

続いて英語学科4年の酒井梓さん、鈴木詩織さん、望月梨沙さん、医学部医学科4年の一迫星来さん、3年の小久保美央さんの学生Unitが、GGJ東日本第二ブロックの英語プレゼンテーション大会予選会でのプレゼンテーションを再現し、「内なるグローバル化を加速させるハブステーション」と題して、英語で発表を行った。日本に暮らす外国籍の方々にはいざというときに機能する地域コミュニティの存在が必要であり、病気や震災日本に住む外国人の方々や外国人観光客の方々をつなぐパイプ役となるべく、グローバル化の加速に向けた学生ハブステーションの立ち上げを提案した。

プレゼンテーションの後は、国際交流センター長の塚本慶一先生の乾杯の発声で、歓談の時間が設けられ、国際交流会の学生によるクイズ大会で大いに盛り上がった。

最後にポールスノードン副学長が和やかな会となったことへの御礼を述べ、「終了」にまつわる日本語独特の表現をユーモアを交えて紹介し、会場は笑いに包まれて閉会となった。

留学生と日本人学生および教職員が楽しく会話する場面が多く見られ、さらに交流を深めることが出来た。

## (4) 中国大使館訪問

実施日：平成28年11月25日(金)

第5回大使館等訪問ツアーが実施され、本学学生7名および教職員2名、計9名が駐日中国大使館教

育処を訪問した。

中国大使館でははじめに、胡志平公使参事官から中国と日本の文化交流の歴史について、両国の交流の始まりから中国と日本のお互いの国に与えた影響や歴史、また日中が抱えている歴史や領土の問題の経緯と現状等、2国間関係について中国語で丁寧にご説明いただいた。

胡参事官からの説明の後は、学生達が今回の中国大使館訪問に向けて各自用意した思い思いの質問を中国語で聞く機会を得た。胡参事官は、緊張しながらも中国語で質問する学生に対して、時に緊張をほぐすような会話を返しながらも真摯に対応をして頂き、学生にとって大変貴重な経験をすることができた。

今回参加した学生たちは、この交流を通して日中両国の架け橋になりたいという志を新たにした。



けるMTIについて」等、さまざまなテーマでお話しいただいた。1年生対象の講義では、学生自身がファシリテーターとなり、先生の講義について中国語での質疑応答を行い、留学を考えている学生からは天津外国語大学での留学生教育の話聞き、留学をより強く考える機会となった、天津外国語大学を留学先として考えたいとの声も上がった。また、上級生にとってもリアルな中国事情等を知る機会となり大変貴重な時間となった。

講義以外では今後の両校の交流の可能性について国際交流課と意見交換をし、これまでの学生交流を更に拡大できることを確認し合った。教員との意見交換では、相互の語学教育方法、教員教育等、幅広く情報交換、意見交換を行うことができた。

短い期間ではあったが、さまざまな角度からご講義いただき、学生にとって大変刺激となる有意義な時間になった。

#### (5) 海外教員の招聘

招聘教員：天津外国語大学 教授 花超氏

実施期間：平成28年11月27日(日)～12月3日(土)

協定校である天津外国語大学高級翻訳学院の院長である花超先生をお迎えし、学生の語学力向上と中国理解の促進を目的にご講義いただいた。

講義では、中国語学科1年生から4年生を対象に「天津外国語大学における留学生への中国語教育について」、「中国語と日本語の発音の比較」、「中国の通訳・翻訳事情」、「通訳者・翻訳者を目指すための外国語学習について」、「天津外国語大学にお

招聘教員：リムリック大学 Maura Casey氏

実施期間：平成28年12月11日(日)～17日(土)

協定校であるアイルランド リムリック大学より講師としてMaura Casey先生をお迎えし、学生の語学力向上と他文化理解を目的としてご講義頂いた。

講義では、主に外国語学部 英語学科の授業の担当として、「IELTS対策」、「アイルランドの文化について」、「リムリック大学について」などのテーマでお話して頂いた。アイルランドの楽器を学生

に知ってもらうために音当てクイズを授業に取り入れることで、学生が積極的に授業に参加する姿が見られた。



またリムリック大学に留学経験のある学生1名、3月からリムリック大学に留学する学生2名、Maura先生の計4名で座談会を実施し、事前の情報共有を行うなど、有意義な時間を過ごすことができた。

12月14日(水)には、Maura先生に講師を担当して頂き、第22回グローバルセミナーを開催した。テーマは、「The Gaelic Athletic Association」と題し、アイルランドの伝統スポーツについてご紹介頂いた。学生並びに教職員からは、実演や動画を用いた講演が大好評で、「わかりやすく、楽しかった」とのコメントが多数あった。

講義やグローバルセミナー以外においては、本学のグローバル事業の一環である英語サロンの担当として、学生との意見交換や語学力向上にお力添えを頂いた。Maura先生は積極的に学生が会話できる環境を大切にしておられ、本学の英語サロンの利便性と重要性についてお話があった。

アイルランドの文化をはじめとした様々な方面からご講義頂き、学生並びに教職員一同、非常に有意義な時間を過ごすことができた。

#### (7) 企業が求めるグローバル人材像について伺う懇談会を開催……………

12月5日(月)、「第3回企業が求めるグローバル人材像」について伺う懇談会を新宿の京王プラザホテルにおいて開催した。

この懇談会は、海外への事業展開を行っている

グローバル企業3社から、自社のグローバル人材育成の現状、求めるグローバル要素等についてお話をお伺いし、本学での教育事業に反映させることを目的に開催された。

はじめに、跡見学長より開催の趣旨説明があり、続いて各社の人事担当者から、自社の状況と取組みについて夫々説明があった。グローバル人材に求められるものとして全ての企業に共通していることは、海外業務にあたる上で語学力は基本的能力としてすでに取得していることを前提に、海外と対等に渡り合うことのできるリーダーシップ、コミュニケーション能力を不可欠としている点であった。それに加え、海外現地スタッフ等多様な人材と円滑に物事を進めるにあたり、「価値観の違いを受容できる力」、「公平性」や「公正性」などもグローバル人材として大切な資質の一つだという意見も聞くことができた。

これらを踏まえ、グローバル人材育成支援に向けた杏林大学に求める教育やカリキュラムについては、ロジカルシンキング、ITスキル、プレゼンテーション力・コミュニケーション力の向上を目指したアクティブラーニング授業の導入であることなど具体的なご意見、ご提案を伺うことができた。

今後も企業からの要望、意見等を聴取する機会を定期的に設け、それらを本学の人材育成プログラムに反映していくこととしている。



懇談会に参加いただいた企業

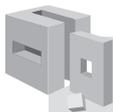
- ① 東洋熱工業株式会社（設備関連建設）
- ② 株式会社ホテルグランドパレス（ホテル）
- ③ トランスコスモス株式会社（IT）

#### **(8) 事業成果としての卒業後の進路……………**

本事業のアウトカムとして「グローバル企業への就職状況」を検証しているが、本事業の開始に伴いグローバル企業に就職する外国語学部の学生数が

増加していることが認められる。平成23年度卒業生における就職者172名のうち、グローバル企業に就職した人数は35人、全体の20.3%であったのに対し、平成28年度卒業生においては就職者181名のうち、グローバル企業に就職した人数は81人に上り、その割合は33.7%にまで増加した。

また、本学におけるグローバル人材育成の成果ともいえる卒業生に関し、実際にグローバル企業へ就職した卒業生と就職先の上司の方にインタビューを行い、ホームページに公表した。



## 8. 大学のグローバル化、教育の質保証の推進体制の確立



### (1) セメスター制度による海外大学等との交流の促進

教育課程の国際通用性向上のための取組みとして、本事業を推進している外国語学部及び総合政策学部ではセメスター制を導入し、「興味関心・能力に合わせた積上型学習」、「海外留学・研修の機会拡大」が実現している。また、交換留学や相互留学派遣においても、留学プログラムの開始時期が春・秋の2回設定されており、学生の学修計画に沿った半年・1年の留学が可能となっている。

### (2) 単位認定を伴う海外研修・留学の推進

大学が認めた海外研修・留学は、そのすべてが単位認定の対象となっている。よって、半年・1年の海外留学に参加した学生も留学期間中の学習成果を単位認定することにより、4年間で卒業できる教育システムが構築されている。

### (3) GPA制度

平成25年度から導入されたGPAによる成績評価制度により「単位認定の質保証」「学修指導(アカデミックアドバイス)への活用」「交換留学相互受入基準の明確化」「奨学金受給者選定基準の厳格化」がより一層実現された。新たにアカデミックアドバイザー制度を運用し、GPAによる履修指導及び留学指導を強化した。GPAの低い学生に対しては、アカデミックアドバイザーの指導が済むまで履修登録をさせないなどのルールを策定したほか、留学指導の際には、派遣基準を満たさない学生については留学時期の再検討を促すなど、より教育の質保証を担保する目安になっている。

### (4) カリキュラムのコース・ナンバリング

平成24年度に導入したコース・ナンバリング制

を精査し、カリキュラムポリシーやカリキュラムマップに基づき、国際標準に準じた科目のナンバリングの整理を行っている。

グローバル人材育成に資する教育内容を拡充することを目的にカリキュラムの刷新、全授業のコース・ナンバリングならびに効果的な履修モデルの策定を行った。

### (5) 教員のグローバル化、全学FD

平成28年6月に明治大学特任講師Annette Bradford氏による日本における英語を使った専門科目の教授法についてのセミナーを行った。English-medium instruction(EMI)手法を用いる講義やグループディスカッションも行われ、グローバルを進めるための英語教授法を学ぶ良い機会となった。同6月の「大学の危機管理を考える」セミナーでは、増加傾向にある海外研修・留学者の対応として、危機管理における重要なポイントや実際の事事例を挙げての家族対応等のレクチャーが行われた。今後、危機管理シミュレーションの必要性も含め、大学の責任としての危機管理を考える良い機会となった。また、語学サロンを教員にも開放することで、語学力の向上を図った。

### (6) 事務職員のグローバル化

平成28年6月に行われた「大学の危機管理を考える」セミナーで教員FD同様に事務職員への危機管理意識の強化も図った。平成28年12月に行われた「テンプル大学SD報告」では、春に米国大使館主催で行われたテンプル大学ジャパンキャンパス及びフィラデルフィア本校で実施された「日本の大学にて国際化に係る教職員向け国内及び海外研修プログラム」の参加報告を行い、研修成果のフィード

バックを行った。日米大学の基本的な違いや大学運営、入試方法、アカデミックアドバイジングを行うスタッフの役割について学ぶ良い機会となった。今後も継続してSDを実施し、全職員のグローバル意識を高めていく必要がある。また、職員においても語学サロンの受講やe-ラーニングの利用を積極的に推進し、グローバル化への意識の向上を推進した。

#### (7) 資料等の多言語化……………

海外大学との教育課程や科目内容等の摺合せをするため、平成28年度から4学部のカリキュラムが改正され、全学部の新カリキュラムの多言語化(改訂版)を作成した。

また、外国語学部をはじめとする八王子に設置されていた3学部・2研究科を井の頭キャンパスに移転したことに伴い、本学を訪れる外国人来訪者のための情報資料として井の頭キャンパス紹介パンフレットの英語版を作成した。

#### (8) グローバルシンポジウムの開催……………

##### 第8回グローバルシンポジウム 「GGJ事業5年間の取組み成果報告及び今後の事業展開」

日 時：平成29年3月11日(土) 14:00～17:00

場 所：井の頭キャンパス F棟310教室

参加者：104名

##### 第一部

特別講演「世界の動きと、これからのグローバル人財育成について」

事業報告「本事業の特色ある取組みについて」

##### 第二部

体験報告「学生によるグローバル活動成果報告」

事業概要・総括

補助期間終了後の事業継続・推進計画について

第1部では、横河電機株式会社 社友 内田 勲氏より「世界の動きと、これからのグローバル人財育成について」と題して特別講演を頂くと共に、塚



本慶一国際交流センター長が「本事業の特色ある取組みについて」と題して5年間の事業報告を行った。

内田氏は初めに最近の世界の動きについて、イギリス・アメリカにおいては労働所得分配の不均衡に起因するEU離脱やトランプ政権の発足に象徴される自国主義への回帰が見られる一方で、グローバル化の進展は今後も変わらず続いていくと述べた。次に、米国製造業の海外移転と人間尊重という観点から、グローバル化による生産性の向上に問題があるのではなく、生産性向上による成果の配分に人間尊重の理念が欠落することこそが問題であると述べた。最後に、「歴史・文化の異なる国々が国を超えて競合し合う今日においては、自分の強みを一つ見定め磨くとともに、その強みを仲間と結集させることのできる人財が求められる」と述べ、「明るく、楽しく、元気よく、これからのグローバル化に対処する人財を育てていただきたい」と締めくくった。

塚本センター長は初めに本事業の歩みを紹介し、平成24年度以来「世界で活躍する、スマートでタフな日中英トライリンガル人材の育成」をスローガンに取り組んできた実績を振り返った。次に、そのスローガンの達成の核となった留学プログラム・留学支援体制や国際交流の現況について、写真も交えて紹介した。更に、学習目標と成果として外国語学部の各学科において設定した学習目標とその達成状況を紹介し、学内のグローバ

ル化の取組みについても触れた。最後に過去5年間に渡って取り組んできた本事業を基盤として今後も国際的に評価される特色ある研究機関を目指してグローバル人材の育成を更に推進していくと述べた。

第2部では外国語学部学生によるグローバル活動成果報告と、坂本 ロビン外国語学部長による事業概要・総括、跡見学長による補助期間終了後の事業継続・推進計画についての発表が行われた。

学生によるグローバル活動成果報告では、中国語学科・英語学科・観光交流文化学科の4年生がGGJ事業を通じて学んだことを発表した。

中国語学科の学生は4年間の学習の成果を存分に発揮し、逐次通訳付きの中国語による発表で会場を大いに盛り上げた。英語学科からは2組が発表を行い、1組目の学生は外国語学部・医学部の共同チームで参加したプレゼンテーション大会のVTRを披露し、他学部と協力してプレゼンに取り組んだことによって新しい視点・刺激を得ることができたと述べた。2組目の学生は、2度の海外研修への参加を通じて海外の大学院への進学を決意した経緯を述べ、将来の希望について語った。観光交流文化学科の学生はニュージーランド留学の様子を紹介し、ホストファミリーやクラスメイトとの交流、旅行や授業時間外の自主学習など自ら考え主体的に取り組んだ課外活動についても紹介した。翌日に卒業式を控える中で発表を行った学生たちの晴れやかな表情からは、杏林大学で充実した学生生活を送ってきたことが伺われた。

坂本外国語学部長による事業概要・総括では、GGJ事業の5年間における本学外国語学部の取組みとその成果を報告した。坂本外国語学部長は海外協定校の拡充や教員向け海外研修の実施、中国語・英語サロンの設置などの5年間の取組みを振り返り、その成果として学生の留学件数の増加・学生の語学力向上を実現した実績を報告した。

最後に跡見学長が補助期間終了後の事業継続・推進計画を発表した。跡見学長は「卓抜した語学

力・スマートでタフな日中英トライリンガルの育成を目標に掲げてきた5年間を経て、学生の留学・研修参加件数が大幅に増加するなどの実績を上げることができた。事業は終了するが、これまでの取組みを継続・発展させ、激動の時代の中でもしっかりと考え行動し社会を変えていくことのできる学生を輩出したい。」と述べた。

#### (9) グローバルセミナー (教職員対象) …………… 第17回グローバルセミナー「Teaching through English: Techniques for Success」

実施日：平成28年6月10 (金)

講師：明治大学特任講師 Annette Bradford氏

場所：井の頭キャンパス F棟211交流プラザ

参加者：教職員他合計30名

明治大学特任講師のAnnette Bradford氏をお招きし、自らの経験及び研究をもとに日本における英語を使った専門科目の教授法についてお話しいただいた。



Annette氏は様々な社会的、文化的、経済的活動等においてグローバル化が進む中で、日本においても学生の英語スキルが求められており、また留学生が日本で学びやすい教育の場を作り出す為に、English-medium instruction (EMI) という手法を用いることを提案している。

セミナーは講義形式のみならず、グループディスカッションも行われた。

「同じクラスに国籍・文化・英語修得レベルの異

なる学生がいる場合の指導法」という例題について各グループで話し合いを行い、まずはその問題点として、英語で話す経験の不足、ポキャブラリーの不足等の理由から、学習者間のレベルに差があることが挙げられ、その上でどのように全ての学生のレベルに合わせた授業を進めて行くかについて更に活発な意見交換が行われた。

Annette氏は最後に、EMIの導入には学習者のトピック理解のために写真やマインドマップなどを使うこと、また指導者は学習者の背景知識を理解しておく必要があると述べた。

出席者から講演の内容について「大変良かった」とのコメントを多数いただき、今後のグローバル化に向けたFD研修として、英語教授法を学ぶ良い機会となった。

### 第18回グローバルセミナー「大学の危機管理体制を考える」

実施日：平成28年6月17日(金)

講師：外務省領事局海外邦人安全課邦人援護官  
伯耆田 修氏

JCSOS 理事長 池野 健一氏

場所：井の頭キャンパス F棟211交流プラザ

参加者：教職員他合計33名



初めに外務省領事局海外邦人安全課邦人援護官の伯耆田修氏により、「緊急事態発生の際の外務省の危機管理対応」と題したテーマで、学生等の海外派遣先にて緊急事態が発生した場合に外務省では

どのような体制を組み、どのように動くかについて講演いただいた。

伯耆田氏は過去の事故の事例を挙げて、被害者の家族の時間の経過による心情の変化に即した家族への対応の具体例を述べ、事故対応時の大学としての取るべき対応や留意点等について助言をいただいた。また学校側の留学先の情報入手の手段として、外務省の海外安全ホームページの活用と、渡航前の「たびレジ」（緊急時情報提供サービス）の登録について説明し推奨された。

続いてJCSOS理事長の池野健一氏は、現在JCSOSが取り組んでいる大学支援システムと緊急事態が発生した際の危機管理対策についてお話しいただいた。池野氏は、学校が海外研修・派遣留学等を実施する際は「安全配慮義務」を要請されており、万が一事故が発生した場合、それが旅行代理店等の仲介による渡航であっても、学校の社会的責任と安全配慮義務違反が問われれば損害賠償責任が発生することを過去の具体的事例を挙げ示唆した。

学校側は海外留学等の参加者に対する情報提供を充分に行い、危険回避への準備や緊急時への対応方法等の説明をおこなう必要があること、また学生が渡航先で事件・事故に遭遇した場面を想定し、学校側の対応能力を検証する「危機管理シミュレーション」を実施するべきであるとした。（この危機管理シミュレーションは以前本学でも実施し、杏林大学の組織的対応力を検証している。）

出席者からは講演の内容について、大学の責任と危機管理の必要性について非常に興味深かったとのコメントを多数いただき、今後のグローバル化に向けたFD・SD研修として各々が大学の危機管理体制を考える良い機会となった。

### 第20回グローバルセミナー「同時通訳演習室の利用について」

実施日：平成28年10月27日(木)

講師：外国語学部 宮首 弘子教授

場 所：井の頭キャンパス F棟208同時通訳演習室  
参加者：教員20名



平成24年度GGJ補助事業採択により整備した同時通訳演習室の一層の利用促進を図るため、中国語通訳を専門とする外国語学部宮首弘子教授より同時通訳演習室の活用方法についてお話いただいた。

宮首教授は初めに同時通訳機器やシステムの操作方法について説明し、併設されているパソコンから中国のニュースやYouTubeの映像を利用して同時通訳のトレーニングを行うことなどを紹介した。

次に宮首教授が中国語を話し、その内容を同じく外国語学部の塚本尋教授が日本語の同時通訳を行うデモンストレーションを行い同時通訳の様子を確認した後、セミナーに参加する教員が同時通訳のブースに入り、機器を扱いながら学生の英語による会話を同時通訳する体験を行った。教員からは「会話を聞いてすぐに訳して話さなければならないことに大変プレッシャーを感じた」との感想が述べられた。

通常同時通訳ブースには通訳者2名が着席して通訳を行う。ブースのスペースがとても狭いので換気扇が取り付けられていること、同時通訳は集中力を使うためおおよそ10分～15分おきにブースに入室している通訳者が交代し補助しながら通訳を行うこと等も紹介された。

その後学生による同時通訳実演が行われた。宮首教授は「同時通訳の授業では学生の指導として、ペアの関係、訳を行う間の取り方などを教育する。学生のレベルによって同時通訳演習室の活用方法を考慮し、同時通訳指導の初期段階では併設するCALL教室を利用し、大人数の発表の際に同演習室を利用する等、授業の目的に応じて演習室を利用することが必要である」と述べられた。

今回は中国語教育での同時通訳演習室の活用法が披露され、そのノウハウを外国語学部内のみならず他部門にも共有することができ、今後同時通訳演習室の活用を進めていく上で有意義なセミナーになった。

## 第21回グローバルセミナー「テンプル大学SD参加報告」

実施日：平成28年12月7日(水)

報告者:総合政策学部 久野 新准教授

場 所：井の頭キャンパス F棟211交流プラザ

参加者：教職員27名

平成28年6月に米国大使館主催によりテンプル大学ジャパンキャンパスおよびフィラデルフィア本校で「日本の大学にて国際化に係る教職員向け国内および海外研修プログラム」が実施された。この研修は、日本の大学の国際化の推進や、米国における大学運営に対する理解の促進、日米の大学のスタイルの違いについて考察する機会の提供を目的としており、国公私立大学の教職員29人が参加した。



今回のセミナーは本学からこの研修に参加した総合政策学部 久野新准教授が、研修への参加成果を学内にフィードバックする全学FD・SDの機会として開催された。

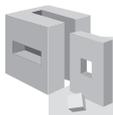
セミナーでは研修の概要とともに、日米の大学における基本的な違いについて、大学運営予算の在り方、入試方法、専門職としてアカデミック・アドバイジングを行うスタッフの仕事内容や役割についてなど多岐にわたり報告された。

久野准教授は「必ずしも米国型スタイルの大学運営が正解ということではない」としながらも、「国際関連部署に留まらず大学全体で留学生を歓迎し受け入れる体制や、卒業生を重要な財産として大学として生涯にわたり支援していく体制づくりな

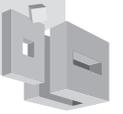
どは、日本の大学においても見習うべき重点課題であるのではないかと述べた。また、「米国においても「国際化」に対して不安感や疑問を抱く教職員がいる中で「大学の国際化」の利益性を見える化を推進しており、日本においても、各大学における「国際化」の必要性を明確にし、学内外での見える化、理解促進に向けた努力、「国際化」に関する啓発活動や支援活動を進めることも必要ではないか」との意見を述べた。

この日はコメンテーターとしてテンプル大学ジャパンキャンパスから島田敬久氏にもご参加いただき、質疑応答では「異文化理解の課題点」、「中退率抑制に有効的な学期内中間評価とアカデミック・アドバイジングの具体的な方法」、「教育方針に関する教員と職員の共通理解の方法」等について、テンプル大学における大学教員とスタッフの職務のあり方や教学システムについて説明をして頂いた。

スノードン副学長はこの報告を受けて「大変有意義な報告、問題提起を受けることができた。今後の発展のためにもこのような議論を続けていきたい。」として研修会を終了した。



## 9. 事業の経過・成果等の対外広報の展開



### (1) 大学ホームページにグローバル事業特設サイトを構築し運営

本事業に係る概要や実績・進捗状況等を、国内外の大学、社会や高校生等を対象に広く発信することにより、本事業の今後の展開及び学生の海外留学の促進に資するため、ウェブサイトの再構築を行った。併せて海外に発信するための英語版ホームページの運営や、学生への情報伝達に配慮したスマートフォン版ホームページの運営等も積極的に進め、タイムリーに情報を発信しながら留学経験者・希望者の交流ネットワーク構築を目指し、より一層の情報発信体制が整備された。



特設サイト：

<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/feature/global/>

### (2) 学内サイトの運用

学内サイト「あんずNET」において、国際交流課のサイトを運用し、本学教職員にむけて事業の進捗状況を随時発信した。海外出張報告書、本学国際交流委員会および本事業推進委員会の議事録等を随時アップロードし、情報共有のツールとして活用されている。

### (3) プレスリリース・サービスの利用

本事業に係る概要や実績やイベントの開催案内等を、国内外の大学関係者、マスコミ関係者および一般ユーザーの方々を含め、1,625の機関に配信し、年間で11000PV以上のユーザーに閲覧、引用されるなど、本事業の今後の展開及び学生の海外留学の促進の取組みを発信した。

### (4) 本事業紹介パンフレットの作成

産業界、受験生(保護者を含む)、高等学校教員

に向けて、本事業の取組み・実績を外部に広く発信するため、『Let's Go Global! 世界をめざそう!』の改訂版を作成、新キャンパス移転に際し中国語版および英語版の大学案内を更新、海外からの訪問客、海外出張の際の訪問先機関および本学在校生に配布した。また、本事業5年間の成果をまとめたデータブックを作成し、本事業成果報告及び今後の事業展開をテーマに実施したグローバルシンポジウムにて配布した。取組み成果を可視化する形式でデータを掲載しており、本事業を広く広報することにつながった。

『経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援平成27年度 事業成果報告書』(日本語)

『大学案内』(中国語、英語)

『Let's Go Global! 世界をめざそう!』

(日本語)

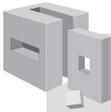
『データで見る グローバル人材育成の成果』

(日本語)



### (5) 学内行事での広報活動

7月および8月に開催された学内行事であるオープンキャンパスと、10月に開催された学園祭で、留学紹介コーナーおよび相談コーナーを設置し、在学生、受験生(保護者を含む)、高等学校教員等に本学の取組みと実績等を広報した。



## 10. 今後の展開



### 【教育課程の国際通用性の向上】

外国語学部は、本補助事業開始とともにカリキュラム刷新の作業に着手し、新キャンパスへ移転した平成28年度に新カリキュラムを始動させた。それに伴い、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを学部・学科の新カリキュラムに合わせて再設定を行い、グローバル人材育成を加速させる制度の充実化を図った。今後は、セメスター制、コースナンバリング制、GPA評価制度、シラバスの多言語化等をもとに、「主体的な留学プログラムActive Studying Abroad Program: ASAP」の拡充を図り、単位取得を伴う留学を活性化させていく。特に、GPAによる学修成果の評価は、海外協定大学との交換留学生の相互受け入れ基準、留学奨学金支給の選考基準等に活用されているほか、アカデミックアドバイザー制度の運用に際しては、GPAによる履修指導および留学指導を強化しており、より教育の質保証を担保する目安にしている。

さらに、キャップ制導入(各セメスター履修単位を20単位まで制限)により、1単位あたりの学修時間(45時間)をより厳密に確保したが、単位・学位のより一層の質保証を図るため、必要に応じてGPA評価と連動させるなど各セメスター履修単位上限の妥当性を改めて検討し、見直しを行っている。

新規に開拓した海外協定校との交流も活性化させ、教員の交換派遣や授業視察・意見交換等の交流機会の拡充、さらには本学教員が外国で教育を提供する機会を開拓するなど、本学教育課程の国際通用性をより一層向上させていく。

### 【グローバル人材として求められる能力の育成】

本補助事業での支援により、中国語・英語の学習環境は大いに改善された。留学前に履修する中国語・英語の授業の教材開発、中国語サロン・英

語サロン、アクティブラーニング教室、同時通訳スタジオ、e-ラーニングシステム等に加え、本学独自のルーブリックも開発された。このルーブリックにより、グローバル人材が具備すべき各能力・スキルを学生に明示できるようになり、学修成果の可視化も実現している。今後は、これらをすべて継続的に活用しながら発展的に改良を加え、グローバル人材に資する能力を備える学生を積極的に育成していく。さらに、高等学校や他大学等からの視察・見学等を積極的に受け入れ、整備された各設備とその運用について広く成果を波及させていく。

### 【語学力を向上させるための入学時から卒業時までの一体的な取組み】

本学では、留学経験・語学検定試験のスコアを積極的に評価するシステムを整えている。入試においては、「資格取得者制推薦入試」では語学検定試験のスコア、「AO入試」「帰国子女入試」においては留学経験・在外経験を出願条件や合否判定の基準の一つに設定するなど、適切に評価している。入学後には、語学検定試験のスコアにより、単位認定・優秀学生奨励金支給等の措置を設けているほか、留学する学生には学納金減免、奨学金支給、学修成果に応じた卒業単位の認定等を実施している。今後も継続実施するとともに、より一層グローバル人材育成を加速させる観点から、これらの基準の妥当性を再確認する機会を定期的に設け、各制度の更なる実質化を図っていく。

### 【教員のグローバル教育力の向上】

本補助期間中に、海外協定校から教員を招聘し中国語や専門科目を中国語で教える授業スキルの向上を図った。また、本補助事業開始後の5年間に本学教員10名をクイーンズランド大学(オーストラリア)のCLIL(Content & Language Integrated

Learning)研修に派遣した。CLILは、外国語で専門科目を教える教授法の一つで、英語を用いて専門科目を教える授業数を増加させる狙いがあった。研修成果を実践形式で報告するFDの機会を用意し、参加していない教員へも成果の波及を図った。今後は、参加できる教員を増やすため、レスター大学(イギリス)によるCLIL研修を学内で実施し、教員のグローバル教育力のさらなる向上を持続的に目指していく。

#### 【日本人学生の留学を促進するための環境整備】

本補助事業開始時には12カ国・地域、32大学・機関であった海外留学・研修先は、現在までに、中国・台湾・香港・タイ・マレーシア等のアジア圏を含む14カ国・地域、54大学・機関にまで拡充

された。外国語学部内には、留学を軸とした主体的な学び(ASAP: Active Studying Abroad Program)を学士課程修了までに完了させる教務的な仕組み「グローバル人材育成プログラム」(①「卓抜した語学力」認定に係る語学検定試験の目標達成、②「スマートでタフな交渉能力」涵養に係る本プログラムの必修・選択科目の単位取得、③本学が実施する海外研修・留学プログラムへの参加により、本学がグローバル人材として認定)を構築し、留学を推奨している。また、「留学フェア」「海外危機管理オリエンテーション」等の留学に係る情報提供の各種機会を継続的に設けるとともに、学納金減免や奨学金制度の充実(本学学納金減免、本学独自の奨学金制度)等の経済支援も継続する。

スーパーグローバル大学等事業  
～ 経済社会の発展を牽引するグローバル人材支援 ～  
**平成28年度 GGJ 事業に係る第三者評価会 報告**

## I 第三者評価会議の開催概要

1. **日時** 平成29年9月15日（金） 14時～16時
2. **場所** 杏林大学井の頭キャンパス C（本部）棟5階 応接室
3. **第三者評価委員**（敬称略）  
内田 勲（横河電機株式会社 社友）  
木村 英樹（追手門学院大学 教授）  
ブルース ストロナク（テンプル大学ジャパンキャンパス 学長）
4. **杏林大学側出席者**  
松田 剛明 副理事長、跡見 裕 学長、ポール スノードン 副学長、  
坂本 ロビン 外国語学部長、塚本 慶一 特任教授、清水 みさ子 国際交流課長、  
岩本 久美子 国際交流課課長補佐
5. **評価のための参照資料**
  - (1) 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援平成28年度事業成果報告書
  - (2) GGJ 事業事後評価調書
  - (3) その他、本事業関連資料

## II 第三者評価報告書

事務局より、平成28年度GGJ事業の特記すべき成果及び採択5年間事業達成状況について報告した後、第三者評価委員（学外有識者3名）から、事業成果に対する各項目への評価及び補助金終了後の本事業の継続に対する意見・助言をいただいた。

### 1) 広報活動の積極化

**【委員】**成果は出ているにも関わらず、広報が出来ていないため学外にやっていると伝わらない。また、グローバルシンポジウム、セミナーなど年間複数回開催しているにも関わらず、参加者が少ないというのは、学内への広報活動もできていないと言える。取り組んでいることを正しく広報し、せめて学内への広報はきちんと行うべきである。

（杏林大学）GGJ事業採択後の翌年から3つの文部科学省補助事業に採択された。どの事業もFD、SDの実施を推進しており、学内において参加すべきFD、SDが多くなってしまい、参加者を集めることができなくなっている状況であった。ただ、このような研修の機会を多く提供することで教職員の意識も変わり、自分から企画、提案をしてくる教職員が増えたことは本事業がきっかけになったといえる。今後も学内のFD、SDの機会を増やし、多くの教職員が参加できるよう開催時間等にも配慮して実施していきたい。

【委員】留学派遣基準を満たさない学生には留学派遣時期を再検討するよう指導するなど、派遣について真面目に取り組んでいることはもっと学外にアピールしてよい。また、ルーブリックによる「スマートでタフな交渉能力」の測定・可視化の構築も行っている。このようなよい取組みは他大学等にも広げてほしい。

5年間で成果が挙がっているにも拘らず、その広報が弱くもったいないと感じる。オープンキャンパス等で本事業の取組みや成果を高校生や父母など関係者にもっと広報すべきである。

この5年間は日中関係が悪化した時でもあったが、5年間一貫して中国分野の教育に注力し続けたことが評価できる場所であり、後にこの効果が必ず出てくると感じている。

本事業の成果として、学生の就職先、地元企業の本事業に関する評価がどうであったかということも広報媒体に盛り込みアピールするとよい。

## 2) 補助金終了後の事業の持続的な継続

### ①継続体制について

【委員】事業を継続するための体制として“GGJ 事業推進協議会”のような組織を設立してはどうか。地域の住民、地域の高等学校、地元の自治体、地元の企業の方を構成員として様々な意見を聴取する機会を設け、杏林大学のグローバル人材育成発展につなげる体制づくりを提案する。

事業継続のための学内組織の位置づけも重要である。事業の第三者評価委員会に毎回学長自ら出席している大学は稀である。このことから GGJ 事業が全学的な取組みとして位置づけられ、成果を挙げられてきたと感じている。だからこそ、補助事業採択中に設置した本事業推進委員会が学長直轄の全学的な委員会であること、平成 29 年度以降も継続、発展的に存続し、全学的な体制で取り組んでいくことを示していくとよい。

(杏林大学) 補助金採択期間から委員会を組織し、事業推進を図ってきた。終了後、この委員会の位置づけについて委員会の中で再検討し学内での体制を整えているが、今回助言いただいた学外の方を入れた体制も検討していきたいと考える。

### ②持続的な継続について

【委員】成果は挙がっているが、目標値を達成できていない項目もあるため、今後に向け目標を達成できなかった原因の分析を行い、目標達成のための方策を示していくことが大切である。

留学帰国者のアフターケア、特にカリキュラム上でのケアが大切である。入学者の多様性に対応できるカリキュラム、留学帰国後のばらつきのある能力のキープ・向上を目指せるカリキュラムの整備を継続して行うとよい。

5年間一貫して中国に注力してきたからこそ、中国語に特化した職員もしくは部署の養成を行ってほしい。これは留学生の受入れ、派遣をスムーズに行うために重要だが、できていない大学が多い。できればアメリカで行われているアカデミックアドバイザーのような教員と職員の間のようなポストの人材を養成できればよいが、日本ではまだまだ難しい。しかし、このような役割を果たす職員の養成ができればよいと考える。

### 3) 今後の推進状況の見える化

【委員】特に地元の高等学校、地元の企業、協議会のメンバーへ向けて事業の推進状況の見える化をすることにより、取組みを伝えていくことが必要。

### 4) 海外留学研修奨学金制度の拡充

【委員】現在は大学経費で奨学金を捻出しているが、同窓会、地元の自治体、地元企業、地元の個人に呼びかけ賛助会員となってもらい、奨学金資金を集めることを検討してはどうか。

(杏林大学) 留学時の授業料減免などの資金援助には早くから取り組んでいるが全て本学の資金で行っているため、今後は助言いただいた対外的な援助を獲得していくことも考えていきたい。また、同窓会からの援助について既に一部の学部で行っているが、更に体制を整えて実施していきたいと考える。

### 5) 杏林大学の強みを活かした学校経営

【委員】医学部、附属病院の機能、外国語学部中国語学科における教育が杏林大学の特筆した強みと言える。この強みを活かし、文部科学省はじめとした各省と提携し、英語・中国語ができる医師の育成、海外の病院設立の支援について国レベルと契約締結、海外病院の医師の卵を受入れ育成する等の特化したシステムを検討できるのでは。また、医師の海外派遣に注力してはどうか。

(杏林大学) 国レベル、自治体レベル、地元高等学校との連携に関しては、高大接続事業により現在10校程度の高等学校と既に連携を構築している。実際、数名の高校生が本学での科目を受講している。また、高校生が入学以前に大学で受講した科目を入学後の大学において科目認定するコンソーシアム連携構想を近郊の大学と調整を行っており、このような取組みについてもっと高等学校に広報していきたいと考えている。

### 6) 全体の評価として

全体の評価については、「excellent」ではないが「good」である。また、このGGJ事業の効果が今後の杏林大学にとってどのような結果を生み出すかが重要である。

評価として

- ・語学のスキルの向上と留学の機会をどのように増やすかが課題である
- ・スマートでタフな交渉能力の測定はもう少し注力しなければならない
- ・PBLの取組みについて評価できる
- ・教職員の英語教育について評価できる

補助事業終了後、これまで行ってきた事業をどのように継続していくかが重要であり、これは杏林大学だけでなく、採択された全ての大学にあてはまることであるといえる。

以上